

博士論文

幼児の造形表現における性差の特徴

令和元年度

筑波大学大学院人間総合科学研究科

ヒューマン・ケア科学専攻

島田 由紀子

筑波大学

はじめに

幼児にとって絵を描くことは好きな遊びの一つである。1歳になる前からペンを握ると画用紙に点を打ち、点はやがて線となる。いくつもの線や螺旋を描く過程を経て、4、5歳には、描いたものが他者にもわかるようになる。この、点から線、そして形を表す過程は万国共通である。絵の描き方を教わらなくても、誰もが同じような過程を経て描くようになっていく。

筆者は、保育者養成課程の教員として、幼稚園教諭、保育士の育成に携わり、同時に保育者に対して造形活動への助言をするなど、造形表現を通じ幼児とかかわってきた。幼稚園や保育所に出向き、絵を描いたり、工作をしたり粘土遊びを楽しむ幼児の姿や表現したものをみると、男児と女児の違いに気付くようになった。お絵かきを楽しむ女児は、仲の良い友達と並んでお話しをしながら、同じような女の子を描く。ドレスにはハートや星の模様を描き、目には長いまつ毛、髪にはリボン、ヒールの高い靴を履き、女の子の横には、同じ形のカラフルなお花が並ぶ。女性の多くは、幼児期に同じような女の子やお姫さまのお絵かきを楽しんだ記憶があるだろう。一方男児は、粘土でカブトムシや恐竜を作るとき、保育者に図鑑を見ながら作りたいことを伝え、保育者もそれに応じる様子が印象的であった。粘土の横に図鑑を並べ、じっくり見ながら本物のように作ろうとしている姿は、ものを作る、表現することに対して真剣そのものであった。表現された絵や工作、粘土には性差があり、その表現の過程にも性差があること知る機会となった。また、保育者は幼児の要求にどのように対応するかによって、表現が大きく変化することも予想された。同時に、幼児の表現している、あるいは表現されたものに対して、どのような指導をするかによって、幼児のその後の造形表現が大きく変わることも推測された。

幼児期に絵を描き、ものを作ることは、造形表現の技術を習得や画材の知識を得ることが目的ではない。友達とかかわり、ものと対峙しながら、試行錯誤するなかで、自分なりの表現や表現の方法を獲得していくことが、造形に限らずさまざまな表現する力や思考力などにつながっていく。

幼児が、より自由に自分らしく造形表現を楽しむためには、幼児の造形表現を理解することが求められている。そのためには、幼児の造形表現の実態を把握する必要がある。実態を把握するためには、幼児の年齢だけではなく性差についても着目する必要がある。

保育者にとって必要なことは、幼児の造形表現を受けとめ共感するだけに留まらず、その幼児らしさを引き出すことである。つまり、幼児の造形表現を理解するとともに、一人ひとりに応じた指導をするためにも、幼児の造形表現にみられる性差の特徴を理解し、性差に配慮した指導をすることが大切であると考えられる。

目 次

第 1 章 問題の所在と目的

第 1 節 幼児の造形表現の性差に関する研究	1
1. 国外における先行研究	
2. 国内における先行研究	
第 2 節 問題の所在	8
第 3 節 本研究の目的と論文の構成	11
1. 本研究の目的	
2. 本論文の構成	

第 2 章 幼児の自由画の色彩による性差の特徴

第 1 節 目的	13
第 2 節 方法	13
1. 分析の対象	
2. 使用色の面積の測定方法	
第 3 節 結果	15
1. 使用色数	
2. 使用色率	
3. 特徴的な男児の使用色、女児の使用色	
第 4 節 考察	24

第 3 章 幼児の自由画に描かれたモチーフの性差の特徴

第 1 節 目的	26
第 2 節 方法	26
1. 分析の対象	
2. モチーフの分類	
第 3 節 結果	30
1. 年齢別のモチーフの比較	
2. 特徴的な男児の自由画、女児の自由画	
第 4 節 考察	39

第 4 章 幼児の自由画の構図にみられる性差の特徴

第 1 節 目的	41
----------	----

第2節	方法	41
1.	分析の対象	
2.	カテゴリ分類の方法	
第3節	結果	45
1.	構図における性差	
2.	特徴的な男児の構図、女児の構図	
第4節	考察	53
第5章 幼児の自由画の構成要素にみられる性差の特徴		
第1節	目的	54
第2節	方法	54
1.	分析の対象	
2.	評定の方法	
第3節	結果	57
1.	評定の内容	
2.	性別および学年からみた評価	
第4節	考察	65
第6章 家庭における幼児の描画と性差		
第1節	目的	66
第2節	方法	66
1.	調査対象者	
2.	手続き	
第3節	結果	67
第4節	考察	72
第7章 総括		
第1節	各研究のまとめ	83
第2節	総合考察	83
第3節	研究の限界と今後の課題	85
1.	研究の限界	
2.	今後の課題	

引用文献
参考文献

資料

第 1 章

問題の所在と目的

第1節 幼児の造形表現の性差に関する研究

これまで幼児や児童の造形発達の研究の中心は年齢を指標とした描画研究が主であった。描画の発達段階を示した Lowenfeld の著書（1947）や描画の過程に着目した Thoma & Silk（1990）、Cizek の美術教育や指導法を記した著書（W.Viola, 1976）には、幼児と児童の描画や指導の事例が年齢にしたがってともに取り上げられているが、性別についての記述はほとんどない。Kellogg（1969）は40カ国の幼児の描画を収集し分析を行っているが、そこで着目されたのは発達段階ごとに出現する形の分類である。これらの研究は、今日の教員や保育者養成における学修内容として重要な位置にあり、幼児の造形教育の研究にも影響を与えている。

保育者養成校で使われている造形に関する教科書の多くで描画発達は取り上げられているが、そこでも年齢を指標とした描画発達の様相が示され、性差については記されていない。また、造形活動の指導においても、年齢に応じた描画材の選択やねらいの設定に関する記述はあるが、性差は取り上げられていない。

しかし、実際の幼児の描画には、描いた対象となるモチーフ、使われている色、画用紙上の線や形の組み合わせによる構成などの表現について性差があることや、好きな色、好きな玩具や遊びなどが性別によって異なることが、保育者によって経験的に語られている。

1. 国外における先行研究

近年の国外の造形表現における性差研究についてみると、Picardad & Boulhais（2011）が、9～15歳の描画について性差を取り上げている。それでは感情を表すために使用されている描画の表現形式について、「感情の直接的な表現」、「内容を示す表現」、「抽象的な表現」、または「これらの表現形式を組み合わせた表現」に分類し、評価を行った。女兒は男児よりも表現力が豊かであり、「感情の直接的な表現」及び、「描画内容を示す表現」と「抽象的な表現」とを組み合わせる傾向が認められたことが報告されている。また保育園児から大学生までを対象にした描画の調査（Wright & Black, 2013）では、女性は男性よりも多くの色を使って描くこと、女性は、空、花や木、建物（ほとんどの場合は家）を描く傾向にあること、男性は人や乗り物を描くこと、保育園児は使用した色数が最も少なく、中学生は小学生よりも多くの色を使って描いていることが確認された。

さらに Alter-Muri & Vazzano（2014）が行った、6歳から11歳の描画について男女の比較検討では、男児は武器や乗り物やスポーツについて描き、色数が少ない傾向がある、女兒は暖色と寒色を使って描く傾向がみられることが報告されている。Siu, Lamb & Wong（2015）による小学生のデザインに関する調査では、女兒は男児より

も多く色を使うこと、高学年の男児は黒または青のみを使って描く傾向がみられることが報告されている。Flannery & Watson (1995) は、小学生の描画の主題について「現実性」「攻撃性」「表現力」「芸術的な技能」の4つの視点に基づき、年齢と性別ごとに特徴を見出そうとした。「芸術的な技能」については、高学年の方が低学年よりも高い評価が得られた。また、男児の描画は女児よりも「非現実的」で「攻撃性が高い」主題が描かれる傾向にあることが示された。Deaver (2009) の小学生を対象とした人物画の調査では、2年生より4年生の方が多くの色を使って広い面積で描くこと、女児は男児よりも実際の色を使って描いていることが報告されている。

つまり、国外における幼児の造形表現に関する先行研究では、造形及び描画における性差の調査対象は小学生以上がほとんどであり、就学前の幼児を対象にした研究は行われていないことがわかる。

2. 国内における先行研究

(1) 幼児の自由画の色彩における性差

国内では、皆本(1979)により、年齢と性別ごとに幼児や児童の造形表現や色彩好悪などに関する比較研究が行われている。皆本(1979)の研究では、男児は青系統の寒色を好むが、女児は赤や赤紫系統の暖色を好むこと、描画表現に使う色は幼児の嗜好に左右される傾向がみられること、女児が男児よりも色彩に関心が高いことなどが報告されている。

皆本・新井(1979)は、3歳から6歳の幼児の描画を構成する重要な要素の一つである色彩を比較するために自由画を収集し、クレヨンの色数や各色の使用量について分析を行った。女児が男児よりも多くの色を使うこと、女児は暖色、男児は寒色を使用する傾向にあることが確認されている。

また皆本(1984)は、児童の自由画に使用される色彩の使用色数、使用色、クレヨン使用量等の性差を検討し、幼児から低学年児童への色彩表現の推移について、幼児との共通性を確認している。さらに1、2歳のなぐり描き期の描画について、色数、色数分布上からの個人差、嗜好色、暖色と寒色の使用傾向の4点についても性差が確認(皆本,1993)されている。

すなわち幼児の自由画の色彩における性差に関する一連の調査研究から、0歳から成人までの造形表現に性差が認められることが示唆されていると言えよう。

(2) 幼児の自由画に描かれたモチーフの性差

5、6歳の自由画の装飾的な表現に着目した調査(皆本, 1979)では、女児に装飾傾向があることが認められた。女児の装飾的な表現の特徴として、花、髪飾り、衣服、髪型、眼、蝶などの出現頻度が高いことが挙げられた。皆本はこの結果について、幼児期

であってもきれいでかわいらしい表現を求める女性特有の意識が影響していると推測し、性差に配慮した教育の必要を提言している。また、出現するモチーフの種類、画面への出現度数、画面中に使用するモチーフの種類数などに性差があることが確認されている（皆本，1980）。

（3）幼児の自由画の構図における性差

これまでの調査結果から女兒の多くが並列型構図を用いていることに着目した皆本（1981）は、9か所の幼稚園や保育所を対象とした横断的調査を行い、並列型構図の出現経緯を精査した。その結果、構図に明らかに性差があり、並列型構図は女兒の描画にみられる特徴であることを確認している。

（4）図形からのイメージ調査における性差

図形からのイメージ調査では、2、3歳児を対象とした折り紙の形からのイメージ調査（瀬尾・戸次・沢井，2017）によって性差の存在が報告されている。男女に同じ形を提示しても、男児は飛行機などの乗り物を、女兒は食べ物や装飾品、花などをイメージしている。このことは2、3歳の頃からすでに形からのイメージに性差があることを示しており、好きなように絵を描く自由画では、男女によってモチーフが異なり、モチーフに応じて使用する色も異なることが推測される。

描画で表すことは描写力が必要であると考えられるが、色を選択することや形からイメージすることは、技術は必要としない。表現技術を問わない、色彩嗜好や形のイメージ調査においても、幼児期から性差が認められたということは、描画や工作、粘土といった造形表現を検討する上で、性差は重要な指標であることを示していると言えよう。

（5）描画診断法における性差

描画表現に関する調査では、山尾・田中（2004）が、幼稚園の5歳児と小学1年生が描いた絵が動的家族画としての要件を満たしているかどうかについて検討を行った。それによると、5歳女兒の動的家族画の特徴として、太陽、花、蝶を描き、装飾的な表現が多いことを挙げている。また、動的家族画には性差の制約を受けていることが考えられることから、投影的解釈の重要な指標であるスタイルやシンボルについて、性差に関連付けて解釈する必要性を指摘している。

幼児期の動的学校画の調査を行った武藤・加藤（2017）によると、女兒が男児よりも多く表現していたのは、花や木、草、家、蝶、ハート、魚、印といったシンボルであり、種類も女兒の方が男児よりも多いことが確認された。女兒の描いた活動的な内容は「ブランコ・鉄棒」が多く、実際には見えないものを描く透視画のスタイルで表現されていることが特徴的であった。

幼児に図形（三角、丸、四角）を提示し、何かに見立てて線を描き加える調査（島田，2011）を行った。それによると4歳児よりも5歳児の方が、より多くの見立てを試みている。図形に線を描き加えることで、見立てが成立している描画を表しているか検討した結果、女兒は男児よりも見立ての描画表現が成立する傾向があることがうかがえた。

また島田(2011)によると好きな対象を好きなように描く自由画とは異なり、何らかの条件を設けた描画調査においても性差があることがうかがわれた。このことは幼児の描画表現や造形表現を考えると、年齢と同様に性差による表現の相違についても検討が必要であると示唆している。

（6）性分化疾患の幼児の粘土表現

性分化疾患の幼児の造形表現にみられる性差については、描画以外に粘土表現を分析対象とした研究がある（島田・堀川・有阪，2010）。先天性副腎過形成症（CAH）の女兒は活発で、乗り物やブロック遊びなど男児が好むとされている物や遊びに興味関心がある（Hines M, 1992；有阪，2000；Berenbaum & Beltz, 2011）が、島田・堀川・有阪（2010）はCAH等の性分化疾患の子どもが作成する立体的な粘土表現にも同様の特徴がみられることを明らかにしている。その結果によるとCAHの4歳女兒の作品（Fig. 1-1）は、左上から時計まわりに、「ハンバーガー」、「葉っぱ」、「ゴルフクラブとボール」、「顔（2個）」、「バットとボール」、「パトカー」、「わからない」であり、男児が好むモチーフが含まれており、8作品と数が多かった。表現技法では、丸める、くっつける、つなぐ、のばす等に加え、女兒の特徴的な粘土を薄く、細く、模様をつける等が認められた。

別のCAHの4歳女兒の作品は、5本のマッチをろうそくに見立てた「私のバースデーケーキ」が表現された（Fig. 1-2）。このケーキ作品には「女兒の丁寧な表現」、「男児の本物への再現性」があると考えられた。

CAHの3歳女兒の5作品は、左上から時計回りに「トンカチ」、「デッドバロン（ウルトラマン）」、「お皿にお肉」、「わからない」、「お誕生日ケーキ」であった（Fig. 1-3）。「お皿にお肉」では、粘土板の凹凸のある模様を写し取った粘土をお皿にし、その上にお肉の塊を乗せている。「お誕生日ケーキ」では、一般女兒と同じように粘土の制作技法がみられ、粘土をまるめて軽くせんべい状にし、マッチ棒をろうそくに見立てていた。なお、「ウルトラマン」や「トンカチ」の道具類を女兒が作ることは非常にまれであり男児的な特徴である。

POR欠損症の7歳女兒の「スーパーマリオの弟」はダイナミックな印象の作品であった（Fig. 1-4）。人形（人間）のような作品であるが、一般女兒の作る「女の子」、「お姫さま」のかわいらしい表現とは異なり、粘土のつけ方は男児のように荒々しかった。女兒は仕上げる際に表面の凹凸を滑らかに整えようとする傾向が多いが、この作品にはそ

うした形跡は見られなかった。

卵精巢性 DSD の 6 歳女兒は「かごの中にうさぎ」を作った (Fig. 1-5)。「うさぎ」、「かご」は女兒が好むモチーフと考え、細かい部分まで丁寧につくっていることから、女兒的な特徴を持つ作品であった。

これらの幼児の粘土表現には、一般幼児の男女の特徴を持ち合わせた表現や男児的な表現が見られることから、性分化疾患の影響がうかがえたことが報告されている。



Fig. 1-1 CAH、女兒（4歳）の作品



Fig. 1-2 CAH、女兒（4歳）の作品



Fig. 1-3 CAH、女兒（3歳）の作品



Fig. 1-4 POR 欠損症、女兒（7歳）の作品
（左：上から撮影、右：横から撮影）



Fig. 1-5 卵精巢性 DSD、女兒（6歳）の作品

第2節 問題の所在

文字を読むことができない就学前の幼児にとって、色や形による印は自分の持ち物や場所を知る大切な手がかりである。幼稚園や保育所において、クラスの名称を象徴するマークが保育室の入り口に掲示され、机ごとのグループ分けにも動物や植物の名称とともにイラストが示されている。幼児が使用する個人ごとのロッカーやタオルかけにも自分の名前の代わりに個別に定められたマークが貼られていることもある。

以下に保育における性差を扱った先行研究をまとめる。幼稚園、保育所に入園したばかりの3、4歳児では、ままごとの役割分担に性差がみられないという指摘がある（武田・笹原・松葉口，2005）。武田らは、家庭での性別に対する考えや性別に応じた環境に加え、入園後の同年齢の幼児とさまざまな経験をする中で、性の区別に気づき、自身の性別について考えるようになるのではないかと指摘している。しかし、坂本（2013）の3歳児のままごとの事例では、ネクタイとベルトをつけたお父さん役を男児が、エプロンを身に着けたお母さん役を女児が、リボンのようにバンダナを頭に結んだお姉さん役も女児が演じている。このとき用意された小道具は、保育者が準備したものである。すなわち3歳児ですでに自身の性を自覚し、他者の性を認識していると考えられる。

青野・金子（2008）の調査では、幼稚園や保育所における幼児が性別を自覚するための配慮として、性別で色を決めたり、性別に集合や整列が行われたり、幼児の性ごとに「～くん」「～ちゃん」と呼称を変えていることが報告されている。金子・青野（2008）は、保育の場で象徴的な名簿や制服、毎日使う靴箱やロッカーの配置を幼児の性で分けることが集団運営の手段として使われていることを指摘している。このように、確かに保育活動を展開する上で1つのクラスを2グループに分けることによって混乱が少なくなると考えられる。また、男女の2グループに分けることで、幼児が待つ時間を作らずにすむ適切な人数になっているとも考えられる。

保育者が保育場面で現れるどのようなことを性差ととらえ、幼児にかかわっているのかについて把握することを目的にした調査を梅本（2015）が実施している。その結果から、保育者は幼児の性差を身体的な側面と遊びの側面からとらえていることが明らかとなった。保育者は幼児の遊びの中で見られる性差に気づき、それを解消しようとしながらも、幼児の自主性を尊重しなければならないという思いを持っていることが報告されている。

青野（2008）は、物的環境や人的環境による性の区別とともに、保育場面における幼児の性別による指導の記録を分析した。保育者は、お遊戯のための音楽や衣装などを男女別に用意していること、幼児をほめるときに、男児には「かっこいい」「強い」、女児には「賢い」「かわいい」と使い分けがされていること、年長児の徒競走では走る速さの性差を理由に男女別に行っていることなどが挙げられている。保育者の、男児には「か

っこいい」ことが、女兒には「かわいい」ことがふさわしいという考えが、幼児への関わりに反映されていることが確認された。

香曾我部・郷家（2019）は、こども園での鬼ごっこの様子から、女兒には集団行動的側面が、男児には攻撃的側面があることを指摘している。集団遊びにみられる幼児の性差の特徴を踏まえた指導を行うには、保育者が性差の特徴を理解することが大切である。

絵本を用いた5歳児のグループによる表現活動では、以下のような報告がされている（小池，2015）。グループを作るとき、早くグループになるのは同性であった。これは同性同士であることによって自己発揮や主張がしやすいことに加え、同性だからこそその仲間意識によるものであると考えられた。一方、グループ活動を行うなかで、特定のひとりの指示を受け入れグループとして表現を成立させているのは男女混合のグループであった。男女混合のグループは性による仲間意識を持たないことから、アイデアを提案した幼児がリーダー的立場となり、ほかの幼児はリーダーに従うという関係が成立したことが要因であると小池（2015）は述べている。グループになるとき、異性と組むことで同性の仲間意識と比べると距離感があり、それが保育者の提示する遊びに集中したり、創造的な遊びに展開したりすることが期待できると推察される。

進野・小川・加藤・川端・松尾・松島・松永（1993）は、幼稚園において3歳児と4歳児の1年間の遊びの記録の分析を行い、園内の素材、道具、遊具を使った遊びがどの程度行われているのか明らかにしている。遊びの性差の特徴として、3、4歳児ともに1学期では男児の方が女兒よりもわずかにままごと遊びが多く見られるが、2学期以降になると女兒の方が増加していたこと、乗り物を用いた遊びは、両年齢とも男児の方が女兒よりも多く、ひとり遊びのときには遊具の選択に性差のあることが確認された。好きな遊びを幼児が自由に選択できるように保育者が配慮している場合でも、幼児の遊びや遊びの遊具の選択には性差があることが確かめられている。

藤岡・片山・阿部・那須・木村（2012）は、幼稚園での飼育について、生き物に苦手意識を持つ女兒に対し、多くの男児が早い段階から身近な動物に興味をもって接する経験が多いとしている。

矢島（2017）による保育活動の記録では、自由遊びに展開された「お店屋さんごっこ」において、女兒主導による「サンドウィッチ屋」と男児主導による「お寿司屋」と遊びの集団が男女で分かれていることを述べている。そのなかで保育者は男女別の集団にそれまで加わっていない幼児がお客として参加しやすい状況をつくることで、男女別の集団をつなぎ、両者の共通性を強めることに至ったとしている。

幼稚園や保育所では、幼児の性別によって物的環境や人的環境が整えられ、その環境の中で長い時間を過ごしていることから、幼児の性差が顕在化している過程であると考えられる。一方で、保育者が幼児の性差の特徴について把握していないことが多いことが推測される。年齢や月齢には配慮した指導計画が立案され、保育活動の中

でも配慮されている。性差によって表現や好きな遊びが異なることは感じてはいるものの、それを具体的に造形表現や保育に反映させるまでには至っていない。造形表現に関する性差について保育者がしっかり持つようになるためには、幼児の身体とともに心の性差を知る必要がある。保育者が幼児の資質・能力を育むためには、幼児の性差の特徴を理解し、性差に応じた活動のねらいや内容を考え、保育活動を展開し、指導を行うことが重要である。

第3節 本研究の目的と論文の構成

1. 本研究の目的

これまでの幼児の造形表現に関する研究では、年齢発達の視点によって分析が行われることが主であった。しかし、幼児の造形活動を設定するときや一人ひとりに応じた造形指導を考えると、性差の視点は年齢と同様に重要である。

そこで、本研究では、幼児の造形表現の性差の特徴を明らかにすることを目的とする。

先行研究から、幼児の造形表現の性差に関する明らかになっていることと課題を整理し、問題の所在を明らかにする。そして、幼児の造形表現の研修対象として自由画を取り上げ、自由画の要素として不可欠だと考えられる、色彩、モチーフ、構図の分析を行う。同時に、造形教育の専門家による評価を行い、自由画の表現の特徴について明らかにする。さらに、家庭での描画の様子や保護者の教育や造形に関する考え方を把握する。

2. 本論文の構成

本研究は、以下の7章から構成されている。Fig. 1-6に本論文の構成図を示した。

第1章 問題の所在と目的

第2章 幼児の自由画の色彩による性差の特徴（研究1）

第3章 幼児の自由画に描かれたモチーフの性差の特徴（研究2）

第4章 幼児の自由画の構図にみられる性差の特徴（研究3）

第5章 幼児の自由画の構成要素（研究4）

第6章 家庭における幼児の描画と性差（研究5）

第7章 総括

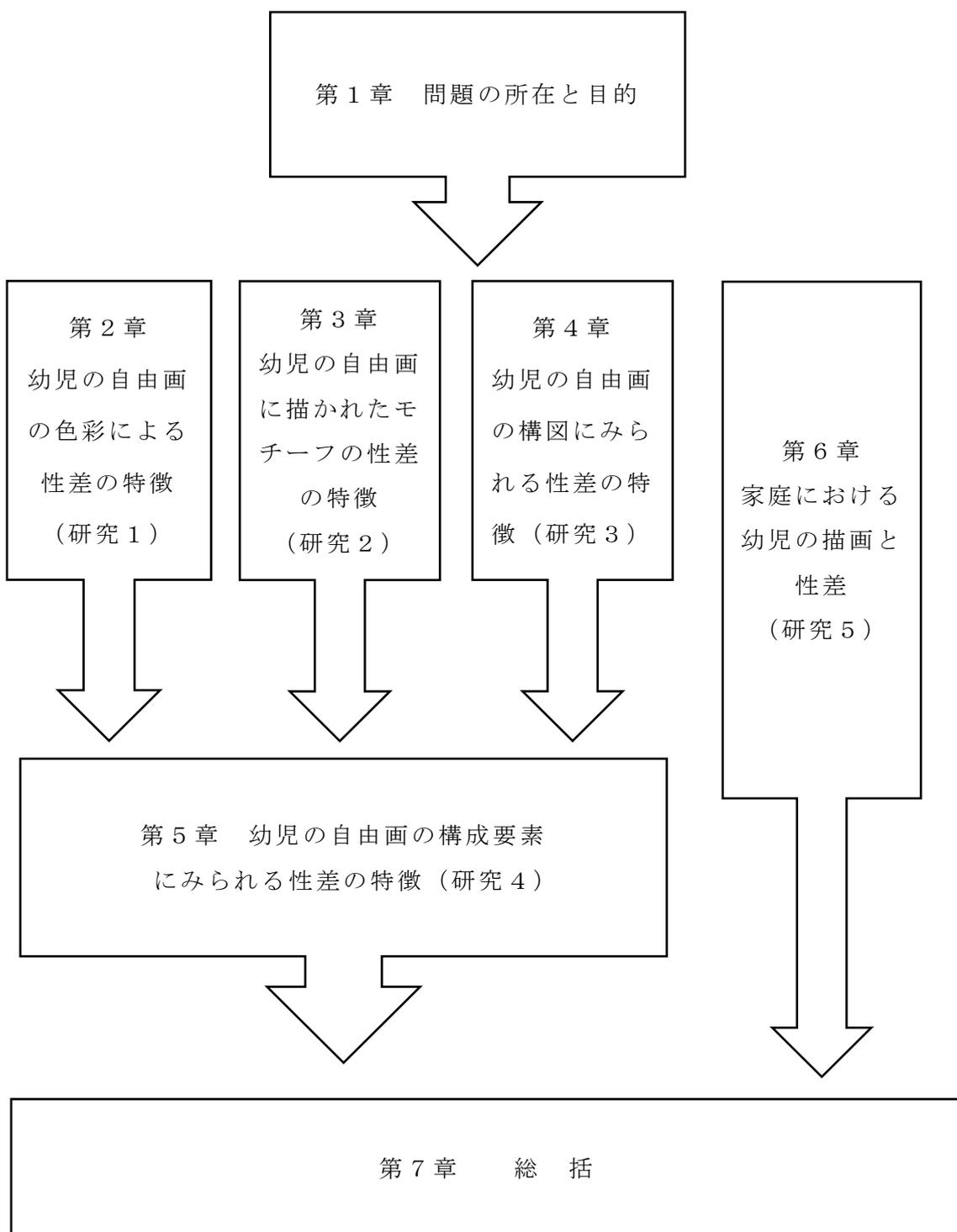


Fig. 1-6 本論文の構成図

第2章

幼児の自由画の色彩による性差の特徴

第1節 目的

幼児が初めて出会う描画材としてクレヨンやパスがある（中尾，2008）。クレヨンには色があることから、描く対象、そのときの気分や気持ちによって使われる色が変わる。テーマが決まっている課題画と異なり、自由画は、幼児自身の好きなものを好きな色で自由に描くことができる。Fleming, Holmes, Barton & Osbahr (1993) が小学生を対象に行った嗜好色調査の結果によると、健康状態が好きな色に影響することを示唆されている。また、Isaacs (1980) が児童を対象としたボールを用いたテストで、低年齢ほど好きな色のボールを使うと得点が高いということが報告されている。幼児は好きな色を使える自由画では、より集中して描き、気持ちを高めることが期待できる。さらに、自身の気持ちに応じて好きな色で描くことができる自由画は、幼児の負担感も少ないことから取り組みやすく、描画表現における色彩表現の性差を把握することに適切な題材であると考えられる。

そこで本章では、自由画で使用されている色彩の色数や使用量について、男児と女児の特徴を把握することを目的とする。

第2節 方法

1. 分析の対象

茨城県及び東京都の幼稚園2園と保育所8園の計10園に通う、4歳児クラス（以下、4歳）男児63名、女児57名、5歳児クラス（以下、5歳）男児91名、女児91名、計302名の描いた自由画を分析の対象とした。

自由画は各園の一斉活動の中で描くこと、また保育者が幼児に自由に絵を描くことを伝えることを園に筆者が直接依頼した。

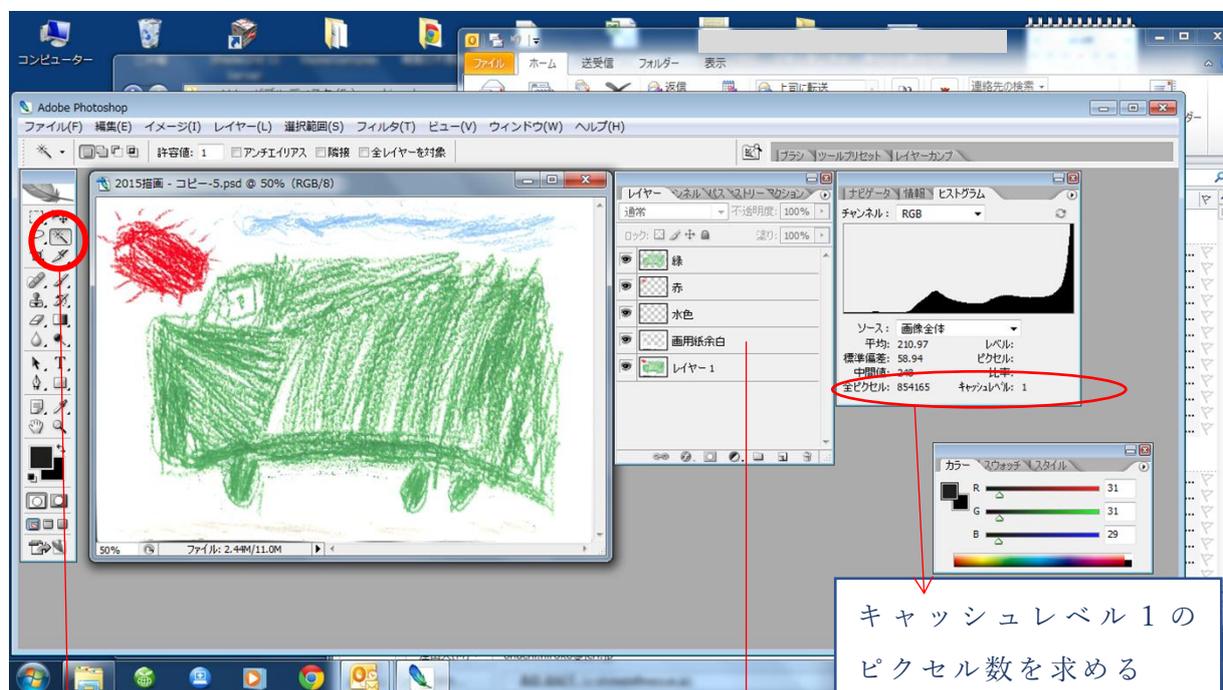
自由画は八つ切りの画用紙1枚に描かれた。描画材は各園で使用している16色のクレヨンやパス（以下、クレヨン）を使った。園によりクレヨンのメーカーは異なったが、全メーカーとも16色セットで、その16色は色名が違っても同一色であることを目視で確認した後、パソコンで画像編集ソフトのPhotoshopでも同一色として認識することを確認した。16色は、赤、ピンク、橙、肌色、黄、黄緑、緑、青、水色、紫、黄土色、茶色、こげ茶、灰色、黒、白であった。

自由画の収集は2014年12月から2015年3月に行った。

本研究は、2014年12月5日に和洋女子大学ヒトを対象とする生物学的研究・疫学的研究に関する倫理委員会の承認（受付番号：第1413号）を受けた。

2. 使用色の面積の測定方法

自由画で使用された使用色数や使用色量を把握するために、画像編集ソフト Photoshop を用いて色を抽出した。手順は、以下の通りである。①自由画をスキャニングしてパソコンに取り込み、16色を識別するためにスポイトツールを用いてそれぞれの色を抽出し、パレットに戻す。②同色と判断されたオブジェクトを自由選択ツールで切り抜き、各色のレイヤーを作成する。③レイヤーごとにキャッシュレベル1のピクセル数をカウントすることで使用された色の面積を割り出す。例えば、Fig. 2-1の自由画の場合、緑、赤、水色、灰色の4色が抽出されたため4つのレイヤーを作成し、それぞれのピクセル数をカウントしている。その結果、緑色：4401769、赤色：546271、水色：257690、灰色：73982になり、使用された色とその色の使用量にあたるピクセル数（面積）を数値化することが可能となっている。



自動選択ツールを使って

色ごとにレイヤーを作る

色	ピクセル数
緑	4401769
赤	546271
水色	257690
灰色	73982

Fig. 2-1 Photoshop による使用色の測定例

第3節 結果

1. 使用色数

ここでは自由画の色彩に関する先行研究（皆本，1986）にならい、混色や重色は含まずクレヨンの16色を対象とした。

学年別に使用色の平均値と標準偏差について Table 2-1 に示した。4歳では、男児の平均は3.49色、標準偏差は2.31、女児の平均は5.40色、標準偏差は3.46であった。5歳児では、男児は平均3.36色、標準偏差2.67、女児の平均は5.16色、標準偏差は3.11であった。男児は4歳が5歳よりも使用色数がやや多く、女児は5歳が4歳よりも使用色数が多かった。

色数において、学年および性別による2要因の分散分析を行った。その結果、学年および性別において交互作用は認められず ($F(1, 298)=0.03, n.s.$)、性別のみに主効果が認められた ($F(1, 298)=29.48, p<.01$)。このことから、4歳、5歳共に、女児の方が男児よりも使用した色数が多いことが確認された。

2. 使用色量

学年別に各色の使用量について男女差があるかどうかについてt検定を行った。

4歳では、男児は女児よりも「赤」の使用量が5%水準で有意に多く ($t = 2.07, df = 118, p<.05$)、女児は男児よりも「肌色 ($t = -3.43, df = 118, p<.01$)」「茶色 ($t = -2.70, df = 118, p<.01$)」「ピンク ($t = -3.83, df = 180, p<.01$)」が1%水準で有意に多いことが確認された (Table 2-2)。

5歳では、女児が男児よりも「ピンク ($t = -5.37, df = 300, p<.01$)」と「肌色 ($t = -5.84, df = 180, p<.01$)」「茶色 ($t = -2.70, df = 300, p<.05$)」が1%水準で有意に多く、「黒 ($t = -1.98, df = 300, p<.05$)」が5%水準で多いことが確認された (Table 2-3)。

3. 特徴的な男児の使用色、女児の使用色

男児の使用色の割合で最も多かった「赤」で彩色された特徴的な自由画を Fig. 2-2 に示した。上の自由画では大部分が線で描かれている中、建物の屋根と思われる上部に「赤」で彩色されていた。「赤」だけが大きな面積を占めているので、より迫力が感じられる表現となっている。下の自由画では恐竜が描かれているが、そのうちの1つが「赤」で彩色され、他の部分的に「赤」で面としてぬらされていたり、線で描かれていたりしていた。「黄」「緑」「紫」などの短い線がカラフルに並ぶことによってアクセントとなっている。「赤」の他に「青」「黄」の使用により原色の強さがより強調されていた。

女児の使用色の割合で有意差のあった「ピンク」「肌色」「茶色」で彩色された特徴的

な自由画を取り上げる。「ピンク」を使った特徴的な自由画を Fig. 2-3 に示した。上の自由画では、画面の中心に大きく描かれたウサギが「ピンク」でぬらされていた。下の自由画では「ピンク」は洋服だけではなく、リボンやハートといった装飾や模様のような表現にも使われていた。「肌色」を使った特徴的な自由画を Fig. 2-4 に示した。ひとを描くときの顔や手足に使われていることが目立つ色であった。「茶色」を使った特徴的な自由画を Fig. 2-5 に示した。「茶色」は上に示した自由画のように地面や基底線を描く色として使われたり、下に示した自由画のように木の幹や、家の部分、あるいはひとの髪の色として使われたりしていた。

Table 2-1 学年および性別に見た使用色数の性差

年齢	男児		女児		F 値 (df)
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
4歳児	3.49	2.31	5.40	3.46	0.03
5歳児	3.36	2.67	5.16	3.11	(1, 298)

4歳男児 n=63、4歳児女児 n=57

* p<.05 **p<.01

5歳男児 n=91、5歳児女児 n=91

Table 2-2 4歳の使用色量の性差

色	男児		女児		t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
赤	393973.73	651141.86	204011.51	249842.17	2.07 *
水色	311600.83	728608.51	409555.72	933636.35	-0.64 n.s.
緑	274604.73	773419.24	90787.26	196313.14	1.74 n.s.
黒	263223.24	428104.78	215957.09	214577.23	0.75 n.s.
黄緑	192308.16	552339.40	98735.91	246472.29	1.18 n.s.
青	182114.17	358628.94	227144.63	716227.14	-0.44 n.s.
黄色	119255.22	243086.62	165398.49	290920.35	-0.95 n.s.
肌色	106493.19	252806.29	349323.84	495237.93	-3.43 **
橙	93306.41	155650.60	80130.96	159470.60	0.46 n.s.
黄土色	69062.68	219842.35	15649.05	45405.69	1.80 n.s.
灰色	60869.83	218212.59	51413.82	188164.66	0.25 n.s.
こげ茶	57953.49	231970.02	79140.37	172940.05	-0.56 n.s.
紫	48707.90	116972.93	78161.65	162447.30	-1.15 n.s.
ピンク	39119.35	96962.99	264261.46	455253.50	-3.83 **
茶色	30042.40	70693.37	105482.63	209243.70	-2.70 **
白	15.40	122.21	2271.11	17146.47	-1.05 n.s.

男児 n=63、女児 n=57

* p<.05 **p<.01

Table 2-3 5歳の使用色量の性差

色	男児		女児		t値	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
水色	551257.79	1215380.47	507511.64	593660.72	0.31	n.s.
赤	452812.03	744181.26	317214.37	421196.81	1.51	n.s.
青	431591.51	999162.45	348311.44	725681.72	0.64	n.s.
黒	290446.96	375010.8152	420956.52	504045.4028	-1.98	*
黄色	178564.51	355523.12	206109.59	294242.85	-0.57	n.s.
緑	149564.08	497462.29	169459.80	430308.6966	-0.29	n.s.
橙	146904.10	363680.49	108802.96	166138.99	0.91	n.s.
灰色	109923.67	291491.9987	84398.70	232349.0769	0.65	n.s.
紫	92024.00	333468.19	84804.73	150971.69	0.19	n.s.
黄緑	83559.46	177328.1883	107635.69	270060.0118	-0.71	n.s.
肌色	70710.07	169373.64	382455.42	480311.21	-5.84	**
こげ茶	66683.40	207822.6611	65272.80	138391.6067	0.05	n.s.
茶色	52526.97	168991.2177	146912.89	287159.3134	-2.70	**
黄土色	48811.78	175566.1641	56523.20	257021.576	-0.24	n.s.
ピンク	33655.58	96761.86	235971.03	346216.34	-5.37	**
白	0.00	0.00	0.00	0.00	—	

男児 n=91、女児 n=91

* p<.05 **p<.01



Fig. 2-2 男児で赤を使った特徴的な自由画



Fig. 2-3 女児でピンクを使った特徴的な自由画



Fig. 2-4 女児で肌色を使った特徴的な自由画



Fig. 2-5 女兒で茶色を使った特徴的な自由画

第4節 考察

本章の調査結果から自由画の使用色数は4、5歳共に男児よりも女児の方が多いことが確認された。本調査の結果は、皆本（1979）が行った3歳から小学6年生までを対象とした描画調査の結果と一致している。また、4歳から14歳までの男女を対象に鉛筆とカラーサインペンを用いた描画調査では、女児はいずれの年齢においても色を使って描くのに対し、男児は年齢が上がると鉛筆だけで描いて色を使わない人数がほぼ半数あるという調査結果が報告されている（Milneru & Greenway, 1999）。クレヨンを使った自由画の先行研究においても、男児より女児の方が使用する色数が多いという結果（Iijima, Arisaka, Minamoto & Arai, 2001）から、描画では女児は色を使って表し、男児は線や形によって表す傾向が示唆された。本研究において、男児は4歳児と5歳では、ほぼ同じ色数を使って描いており、色を使った表現には関心が薄いことが推測された。

日名子（2009）は女児の描画の特徴として、ひとの服装の細かい模様や形の描き分け、彩色の器用さを挙げていることから、模様や形の細かさとそれに応じた彩色が、より多色の表現に結びついていることが考えられる。また、仁科・杉本（2007）によると、小学2年生の女児がすでに成人と同等に概念的な色を理解していることに比べ、男児の概念的な色の理解は小学2年以降であり女児に比べて遅いと結論づけている。これらのことから、女児の方が色彩への関心を持っていることがうかがえる。

さらに、本調査の対象である女児では描く内容によって、概念的に色を使用する一方、男児は描く内容とは関係なく、好きな色を選んで使用していることも考えられる。加えて、女児はかわいいものを好む傾向があり、かわいいものに対して色の中でも特にパステルカラーに結びつける傾向があることから（Hoshino, 2016）、女児はかわいいとされる色にこだわりを持っていることが考えられる。

本調査では、男児で最も使用割合の高い色は「赤」であったが、4歳では男児よりも女児の方が「赤」の使用量が有意に多かった。しかし5歳では有意ではなかった。5歳の洋服や持ち物が男児は青などの寒色系であることを青野（2008）が指摘しているように、4歳よりも5歳の方が、色に対する性差の意識をするようになることから、5歳の男児は「赤」を女の子色であると思うようになり、使用量が減少することが考えられる。

女児は「水色」の使用割合が最も多く、男児においても使用割合が2番目に多い色であったが、描画収集時に流行していたキャラクター（アナと雪の女王）の服装の色の影響が要因のひとつであると考えられる。色の嗜好は時代とともに変化することを大橋（2007）が指摘しているように、キャラクターの流行が幼児の嗜好色、そして自由画の使用色にも反映されることは考えられる。女児特有の「ピンク」「紫」の多さ

は、女兒向けのアニメのキャラクターのイメージカラーとして使われることが多い色でもあり、キャラクターの髪、洋服や装飾のリボン等にも使われている色であることから、女兒の自由画の彩色にも影響していたことが考えられる。

女兒にとって「ピンク」はかわいい色だと感じる色であることから（清澤，2014）、女兒は洋服や靴、リボンなどひとを飾る部分に積極的に使用することが考えられる。幼児や児童がうさぎを「ピンク」にぬる理由にも「かわいい」からとの理由があることから（服部・堀内・勝野・板垣・加藤・井上・前田・花園・赤尾，2007）、「ピンク」はかわいいから女兒が好んで使用することが示唆された。

女兒は「肌色」の使用量が多い。それは人物を描くことが多いことが影響していると考えられる。糸井（2019）の幼児の課題画の調査では、肌の色や顔のように視覚的にインパクトの強い部分には形よりも色を優先して表すことが確認されている。5、6歳の人物画を調査した三浦・渡邊・渡邊・大山（2005）によると、およそ30%の幼児が人物を描けるようになり、その頃からボディイメージに性差が認められたと結論づけていることから、女兒が男児よりも人物を描き、顔や手足を「肌色」で、髪の毛やまつ毛を「茶色」で彩色していたことが推測された。

第3章

幼児の自由画に描かれたモチーフの性差の特徴

第1節 目的

幼児の自由画の研究において、男児と女児とでは表現が異なることが指摘されている（新井，2001）。男児と女児の使用色の違いはそれぞれの嗜好色との関係も考えられるが、描く対象であるモチーフが異なることによる影響があることも推測できる。そこで本章では、幼児が自由画に描いたモチーフに焦点をあて、男児と女児の描くモチーフのそれぞれの特徴を明らかにすることを目的とする。

第2節 方法

1. 分析の対象

茨城県及び東京都の幼稚園2園と保育所8園の計10園に通う、4歳児クラス（以下、4歳）男児63名、女児57名、5歳児クラス（以下、5歳）男児91名、女児91名、計302名の描いた自由画を分析の対象とした。

自由画は各園の一斉活動の中で描くこと、また保育者が幼児に自由に絵を描くことを伝えることを園に筆者が直接依頼した。

自由画は八つ切りの画用紙1枚に描かれた。描画材は各園で使用している16色のクレヨンを使った。

自由画の収集は2014年12月から2015年3月に行った。

本研究は、2014年12月5日に和洋女子大学ヒトを対象とする生物学的研究・疫学的研究に関する倫理委員会の承認（受付番号：第1413号）を受けた。

2. モチーフの分類

（1）モチーフのカテゴリ

自由画に描かれているモチーフを「自然（花以外）」「花」「ひと」「キャラクター」「生き物」「家」「乗り物」「装飾」「その他」「不明」の10カテゴリに分類した。各カテゴリとモチーフの代表的な例についてTable 3-1に示した。

皆本（1986）による調査では、幼児の自由画には「樹木」「太陽」「空」「大地」などの「自然」や「動物」や「蝶」といった「生き物」が多いことが報告されている。それによると男児と女児とでは「樹木」「太陽」「空」「大地」といったモチーフに違いがあることは報告されていないが、「花」のモチーフは女児特有のものであると指摘しており、「人間」「住宅」「装飾」についても女児の特徴としている。そこで、本研究では「花」と「花」を除いた「自然」とにカテゴリを分けた。また、幼稚園ではぬりえとして「キャラクター」が用意されていたり（植草，2016）、描画活動で「キャラクター」が描かれたりする（青陽・高橋，2015）ことから、「ひと」でも「生き物」でもない「キャラク

ター」を設けることにした。それ以外のモチーフは「その他」、ぬりつぶしや螺旋など何を描いたのかわからない場合は「不明」とした。

(2) モチーフの判定方法

本調査では、モチーフのカウント方法として各カテゴリに該当するモチーフが、描かれているか、いないか、について着目した。たとえば「花」が1つだけ描かれた場合でもいくつも描かれていた場合でも「花カテゴリ」を「ある」と判定した。また、「太陽」「海」「木」と「女の子」が描かれていた場合、「自然カテゴリ」と「ひとカテゴリ」の両カテゴリを「ある」と判定した。

「ひと」と「キャラクター」の判定については、保育者養成校の学生5人に個別に1枚ずつ判定を求め、一致率が60%以上になったカテゴリを採用とした。

Table 3-1 各カテゴリと例

カテゴリ	例
自然(花以外)	木、海、太陽、空、地面、山など(花以外)
花	チューリップなど
ひと	女の子、お姫様、男の子、王子様、お父さん、お母さんなど
キャラクター	妖怪ウォッチ関連、アナと木の女王関連、ドラえもんなど
生き物	うさぎ、くま、猫、犬、ライオン、ペンギン、ひつじなど
家	家、テーブル、椅子、ドア、階段、ベッド、電気など
乗り物	飛行機、自動車、ロケット、船、ヘリコプターなど
装飾	ハート、リボン、クローバー、星、ダイヤモンドなど
その他	食べ物、文字、迷路、鉄砲、お金など
不明	ぬりつぶし、螺旋など



この自由画には「太陽」と「虹」と「女の子」が2人、「もな」「みく」という文字が表されている。この自由画のモチーフのカテゴリ分類は、「太陽」「虹」が「自然カテゴリ」、「女の子」2人は「ひとカテゴリ」、「みく」「もな」という文字は「その他カテゴリ」があると判定する。



この自由画には「海」と複数の「くらげ」「タコ」「イカ」が表されている。この自由画のモチーフのカテゴリ分類は、「海」が「自然カテゴリ」がある、複数の「くらげ」「タコ」「イカ」は「生き物カテゴリ」があると判定する。



この自由画には「女の子」と複数の「リボン」と「ハート」が表されている。この自由画のモチーフのカテゴリ分類は、「女の子」が「ひとカテゴリ」がある、複数の「リボン」「ハート」は「装飾カテゴリ」があると判定する。

Fig. 3-1 カテゴリ分類の例

第3節 結果

1. 年齢別のモチーフの比較

描かれたモチーフに性差がみられるのか、年齢別にモチーフごとに比較することを試みた。

(1) 4歳

4歳の幼児が描いた自由画のモチーフのカテゴリごとに、性差があるかどうかについて χ^2 検定を行った結果をTable 3-2に示した。その結果、女兒は男児よりも「自然(花以外 ($\chi^2=13.08$, $df=1$, $p<.01$))」「装飾 ($\chi^2=27.66$, $df=1$, $p<.01$)」において1%水準で有意に多く、男児は女兒よりも「不明 ($\chi^2=18.52$, $df=1$, $p<.01$)」において1%水準で有意に多いことが確認された。性差が認められたのは10カテゴリの3カテゴリであった。

(2) 5歳

5歳の幼児が描いた自由画のモチーフのカテゴリごとに、性差があるかどうか χ^2 検定を行った結果をTable 3-3に示した。その結果、男児が女兒よりも「乗り物 (fisher 直接確率計算法 $P=0.00$)」「不明 ($\chi^2=9.74$, $df=1$, $p<.01$)」において1%水準で有意に多かった。女兒は男児よりも「ひと ($\chi^2=57.41$, $df=1$, $p<.01$)」「装飾 ($\chi^2=32.71$, $df=1$, $p<.01$)」において1%水準で有意に多く、「生き物 ($\chi^2=4.46$, $df=1$, $p<.05$)」「花 ($\chi^2=6.02$, $df=1$, $p<.05$)」において5%水準で有意に多いことが確認された。5歳で性差が認められたのは10カテゴリのうち6カテゴリであった。5歳は4歳に比べ、性差が認められたカテゴリが多いことが明らかとなった。

2. 特徴的な男児の自由画、女兒の自由画

今回の調査結果から男児の特徴的なモチーフとして「乗り物」が挙げられる (Fig. 3-2)。「乗り物」は「電車」「船」「ロケット」などが描かれていた。女兒では「ひと」にはワンピースやドレスを着た「女の子 (Fig. 3-3)」同性が描かれている。また「花 (Fig. 3-4)」は同じ形を繰り返し描くことが多く、これは「装飾 (Fig. 3-5)」にも共通している。女兒が描く「生き物 (Fig. 3-6)」は「猫」や「うさぎ」などが描かれていた。「不明 (Fig. 3-7)」は男児に多く、線や点が描かれていた。

Table 3-2 4歳におけるモチーフの性差

カテゴリー	男児		女児		χ^2 値
	人数	割合	人数	割合	
ひと	39	61.9	39	68.4	0.56 n.s.
自然(花以外)	18	28.6	35	61.4	13.08 **
生き物	8	12.7	11	19.3	0.98 n.s.
乗り物	8	12.7	6	10.5	0.14 n.s.
装飾	7	11.1	32	56.1	27.66 **
キャラクター	5	7.9	2	3.5	※0.26 .
花	4	6.3	28	49.1	※0.00
家	4	6.3	5	8.8	※0.44
その他	21	33.3	20	35.1	0.04 n.s.
不明	54	85.7	28	49.1	18.52 **

※fisher 直接確率計算法による

*p<.05 ** p < .01

Table 3-3 5歳におけるモチーフの性差

カテゴリー	男児		女児		χ^2 値
	人数	割合	人数	割合	
自然(花以外)	51	56.0	61	67.0	2.32 n.s.
ひと	23	25.3	74	81.3	57.41 **
キャラクター	18	19.8	12	13.2	1.44 n.s.
家	16	17.6	20	22.0	0.55 n.s.
生き物	15	16.5	27	29.7	4.46 *
乗り物	11	12.1	1	1.1	※0.00
花	6	6.6	17	18.7	6.02 *
装飾	7	7.7	41	45.1	32.71 **
その他	30	33.0	31	34.1	0.25 n.s.
不明	53	58.2	32	35.2	9.74 **

※fisher 直接確率計算法による

*p<.05 ** p <.01

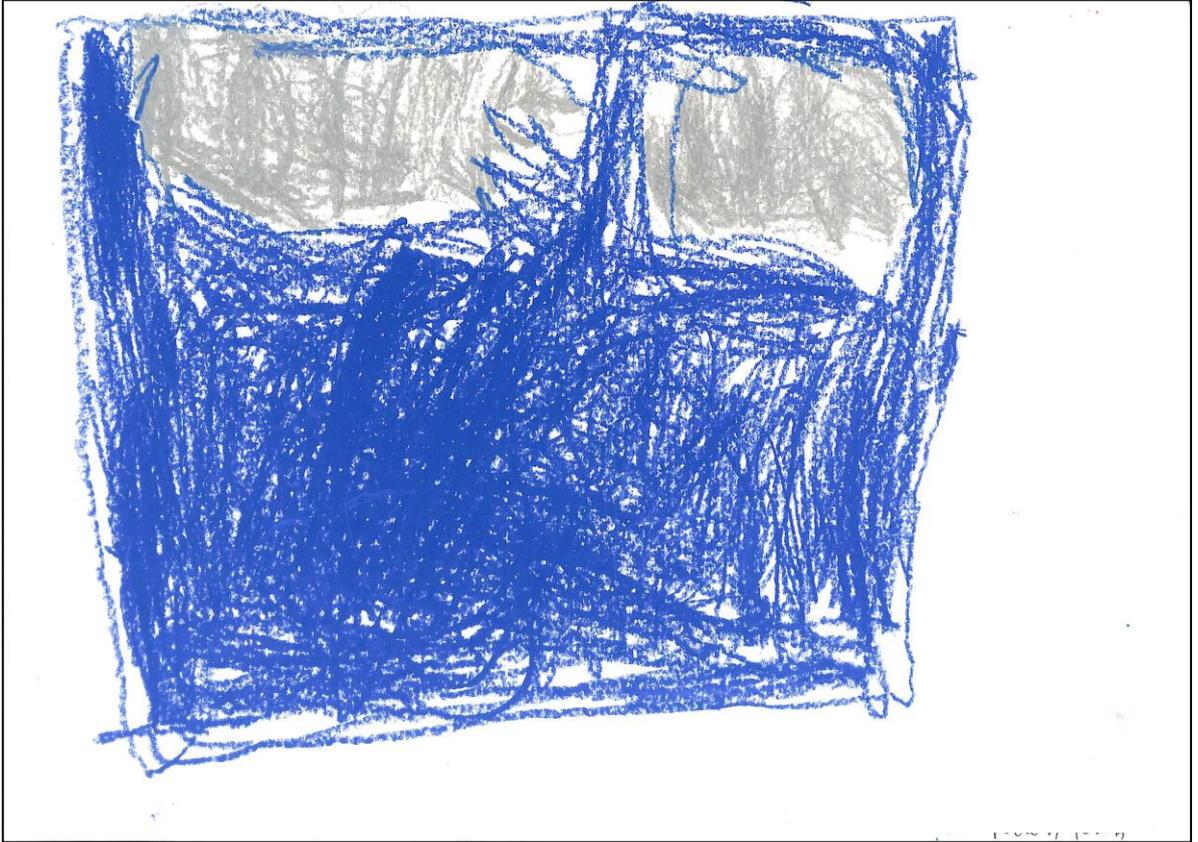


Fig. 3-2 5歳男児の描く「乗り物」



Fig. 3-3 5歳女児の描く「ひと (女の子)」



Fig. 3-4 5歳女児の描く「花」



Fig. 3-5 4歳女児の描く「装飾」



Fig. 3-6 5歳女兒が描く「生き物」

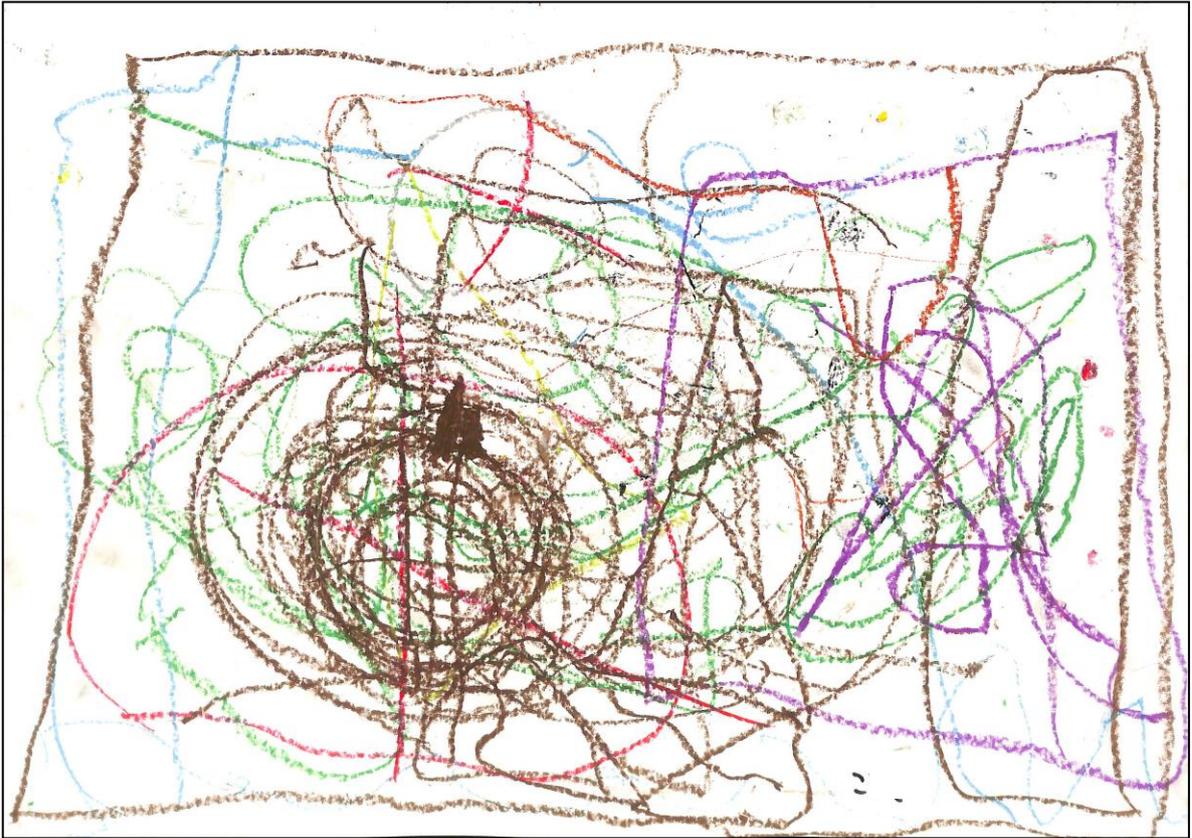


Fig. 3-7 4歳男児の描く「不明」

第4節 考察

性差の認められたカテゴリが4歳では3カテゴリであったが、5歳では6カテゴリと多かった。このことから、5歳になると描かれるモチーフに性差がより表れるようになることが確認された。4歳から5歳になるこの時期に性差が顕著になっていくことが推測された。

モチーフのカテゴリをみると、5歳では男児は女児よりも「乗り物」を多く、女児は男児よりも「ひと」「生き物」「花」を多く描くことが確認された。また、4、5歳ともに女児は男児よりも「装飾」を多く描くことが読み取れた。カテゴリの内容からも学年が上がると、男女の特徴が際立つようになることが推測された。皆本（2017）は、男児の方が女児よりも多く「車・飛行機」などの「乗り物」を描くこと、その背景に男児のパワーやスピードへの憧れがあること、女児の特徴として「人間の女」「花」を挙げており、女児の自由画には「人間」を中心とし、「人間」をつつむ「自然」が「装飾」されていることを指摘している。今回の調査結果からも男児の特徴的なモチーフとして「乗り物」が挙げられる。女児の「ひと」の靴にはヒールがあり、ワンピースやドレスを着た「女の子」や「お姫様」といった同性が描かれることが多く見られた。自由画で描かれるモチーフは、幼児自身が興味や関心のあるものや好きなものを描いていることから、男児は「乗り物」、女児は「女の子」や「お姫様」に興味があり好きであると考えられる。

男児は「車」、女児は「ひと」に興味や関心を持つことについては、新生児を対象にした知覚の調査からも同様の結果がうかがえる（Connellana, Cohena, Wheelwrighta, Batkia & Ahluwalia, 2000）。そこでは、男児は女児よりも「車」を、女児は男児よりも「ひとの顔」を見る時間が長いという結果が示されている。このことから、新生児期からすでに男児と女児とは興味や関心のあるものが異なり、それが幼児期の自由画にも表れていると考えられる。女児の絵の特徴として杉浦（2009）は、長い髪、長いスカートをはきたいお姫様型の女の子像、と具体的に示しているように、本研究の結果においても女児の描く「ひと」は、ドレスやハイヒール、リボンなどで着飾った「女の子」や「お姫様」が多く見られた。女児の描く「ひと」には女児自身の願望や夢が描かれているが、男児の描く「ひと」には、アクセサリや持ち物などはほとんど見られなかった。同じ「ひと」であっても、男児と女児とでは異なる「ひと」を描き、その表現には「装飾」の有無の違いがあり、男児は実際の「ひと」をリアルに、女児は「ひと」に対して憧れや願望を描いていると考えられる。「花」も女児の方が多く描き、「装飾」的なモチーフも男児より多いということも、かわいらしさへの憧れであることがうかがわれる。

何を描いたのか判断できなかった「不明」は、4、5歳ともに女児よりも男児に多かった。この結果から、男児の方が女児に比べ描画発達が遅いことが考えられる。図形模

写と人物画描画発達の調査を行った先行研究（郷間・川越・立田・中市・郷間・鈴木・落合，2013）において、女兒は男児よりも図形模写、人物画描画のいずれも得点が高かったことから女兒の方が男児よりも描画発達が早いとしている。このことから、この時期の幼児は、女兒の方がモチーフの特徴を描き表すことができると考えることができる。

3歳から5歳を対象とした遊びの嗜好調査（藤田，2005）によると、男児は年齢とともにお絵かきの嗜好が低下するが、女兒はどの年齢でもお絵かきが最も好まれると指摘されている。同様の調査では、幼児期の好きな遊びとして、男児よりも女兒の方がお絵かきやぬりえを好むという笹原（2009）の報告もある。したがって、女兒は男児よりも自由に描くことを好み、描き慣れていることが本研究の結果に影響していることが考えられる。

第4章

幼児の自由画の構図にみられる性差の特徴

第1節 目的

幼児の自由画では色や形の他に、幼児特有の描画表現による構図やモチーフが描かれる位置が必要な要素となる。同じモチーフであっても、描画表現や画用紙上に描かれる位置によって自由画全体の印象は変化する。栗山（2010）は、構図をある程度意識する幼児であっても描きながらイメージを広げる描き方をすることから、偶然的な手順や線や形での表現が見られると述べている。言い換えれば幼児の構図には、幼児のイメージの広がりや好みといったものが無意識に表現されると考えられる。本節では、自由画の構図における、男児と女児の特徴を明らかにすることを目的とする。

第2節 方法

1. 分析の対象

茨城県及び東京都の幼稚園2園と保育所8園の計10園に通う、4歳児クラス（以下、4歳）男児63名、女児57名、5歳児クラス（以下、5歳）男児91名、女児91名、計302名の描いた自由画を分析の対象とした。

自由画は各園の一斉活動の中で描くこと、また保育者が幼児に自由に絵を描くことを伝えることを園に筆者が直接依頼した。

自由画は八つ切りの画用紙1枚に描かれた。描画材は各園で使用している16色のクレヨンを使った。

自由画の収集は2014年12月から2015年3月に行った。

本研究は、2014年12月5日に和洋女子大学ヒトを対象とする生物学的研究・疫学的研究に関する倫理委員会の承認（受付番号：第1413号）を受けた。

2. カテゴリ分類の方法

（1）カテゴリの項目

ここでは自由画の構図を「描画表現の特徴」と「描いた位置」の2つに分けた。

「描画表現の特徴」は幼児の描画表現の特徴とされている中から、皆本（2017）が男女の構図の違いとして提示することの多い「横並び型並列表現」「積み重ね型並列表現」「一点拡大」「俯瞰表現」「カタログ表現」と「その他」の6カテゴリとした。幼児の画用紙のスペースを扱っている先行研究（Alschuler & Hattwick, 2002）に倣い、「上部集中」「下部集中」「右または左に集中」「中心」「バランスの取れた」と「その他」の6カテゴリとした。各カテゴリの項目と描かれ方について Table 4-1 に示した。

（2）カテゴリの判定方法

カテゴリの判定は、「描画表現の特徴」「描いた位置」のいずれも各カテゴリに当てはまるか否かで判断した。

「描いた位置」では、画用紙のどのスペースに描かれているのかについて判定するために、透明のシートに縦横それぞれ均等に3本の線を引き、自由画の上に重ね、描かれている位置を確認した。「描いた位置」が「上部」と「右」に集中していた場合は、「上部集中」と「右または左に集中」にそれぞれ「ある」と判定した。3枚の自由画の判定の例を Fig. 4-1 に示した。

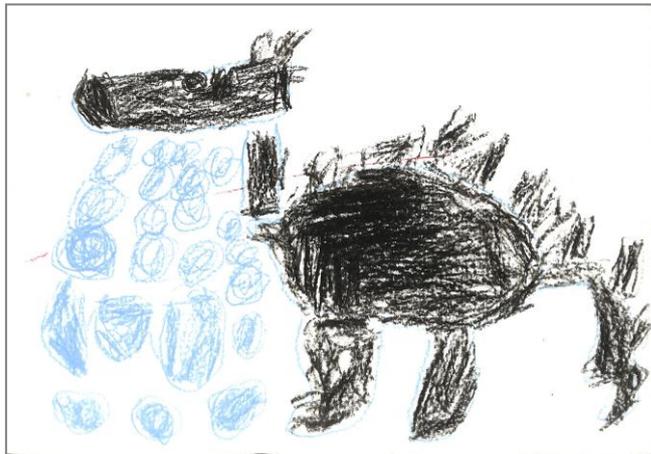
Table 4-1 構図のカテゴリ分類

カテゴリ		描かれ方
表現の 特徴	横並び並列表現	横に並んだ状態で描かれている
	積み重ね型並列表現	縦に積み重ねるように描かれている
	一点拡大表現	一つのモチーフが大きく描かれている
	俯瞰表現	上から見たように描かれている
	カタログ表現	脈絡なく並べて描く
	その他	上記の表現以外
描いた 位置	上部集中	画用紙の上部に集中して描かれている
	下部集中	画用紙の下部に集中して描かれている
	右または左に集中	画用紙の右または左に集中して描かれている
	中心	画用紙の中心に集中して描かれている
	バランスの取れた	画用紙にバランスよく描かれている
	その他	上記以外



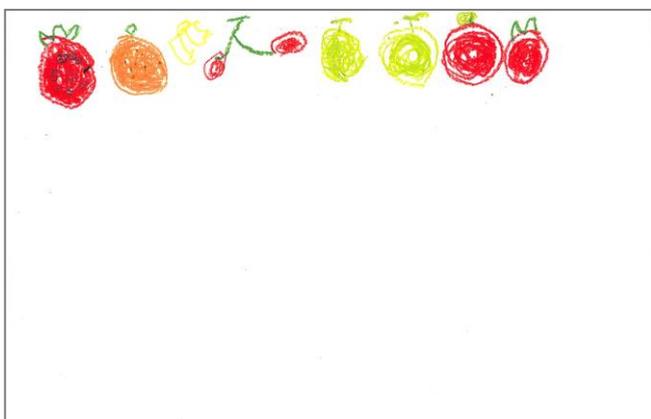
「横並び型並列表現」「バランスの取れた」構図の例

女の子が6人横に並び、照明も5つ並ぶように描かれていることから「横並び型並列表現」であると判定した。また、画用紙の空間の使い方は「バランスの取れた」構図であると判定した。



「一点拡大表現」「バランスの取れた」構図の例

この自由画では、馬が大きく描かれていることから「一点拡大表現」と判定した、画用紙の空間の使い方は「バランスの取れた」構図であると判定した。



「横並び型並列表現」「上部集中」の構図の例

フルーツが複数横に並んで描かれていることから「横並び並列表現」と判定した。また、画用紙の上部に集中して描かれているので「上部集中」の構図と判定した。

Fig. 4-1 構図のカテゴリの判定例

第3節 結果

1. 構図における性差

(1) 「表現の特徴」のカテゴリごとの性差

年齢別に幼児が描いた自由画の構図における「表現の特徴」に性差があるかどうかについて、カテゴリごとに χ^2 検定を試みた。

① 4歳

4歳の構図における「表現の特徴」の性差について、カテゴリごとに χ^2 検定の結果をTable 4-2に示した。

女兒は男児よりも「横並び型並列表現」において1%水準で有意に多いことが確認された($\chi^2=31.81$, $df=1$, $p<.01$)。男児は女兒よりも「その他」において1%水準で有意に多いことが読み取れた($\chi^2=10.67$, $df=1$, $p<.01$)。他のカテゴリには有意差が認められなかった。

② 5歳

5歳の構図における「表現の特徴」の性差について、カテゴリごとに χ^2 検定の結果をTable 4-3に示した。

女兒は男児よりも「横並び型並列表現」において1%水準で有意に多いことが確認された($\chi^2=32.34$, $df=1$, $p<.01$)。男児は女兒よりも「その他」において1%水準で有意に多いことが読み取れた($\chi^2=15.17$, $df=1$, $p<.01$)。他のカテゴリには有意差が認められなかった。

(2) 「描いた位置」のカテゴリごとの性差

年齢別に幼児が描いた自由画の構図における「描いた位置」に性差があるかどうかについて、カテゴリごとに χ^2 検定を試みた。

① 4歳

4歳の構図における「描いた位置」の性差について、カテゴリごとに χ^2 検定の結果をTable 4-4に示した。どのカテゴリにおいても有意差が確認できなかったことから、自由画に描かれる「描いた位置」による構図は、4歳では性差が認められなかった。

② 5歳

5歳の構図における「表現の特徴」に性差について、カテゴリごとに χ^2 検定の結果をTable 4-5に示した。女兒は男児よりも「バランスの取れた」において1%水準で有意に多いことが確認され($\chi^2=7.81$, $df=1$, $p<.01$)、男児は女兒よりも「その他」において5%水準で有意に多いことが確認された($\chi^2=0.46$, $df=1$, $p<.05$)が、それ以外のカテゴリでは性差が確認できなかった。

2. 特徴的な男児の構図、女兒の構図

特徴的な構図で描かれた自由画を、男女別に取り上げる。

女兒の特徴的な構図である「横並び型並列表現」を Fig. 4-2 に示した。この構図には、地面を描き基底線としその上に花や女の子が並んで描かれている場合や、基底線を描いてなくても画用紙の下端を基底線とみなして描かれていることが多かった。

「バランスのとれた」構図の自由画を Fig. 4-3 に示した。男女ともそれぞれのモチーフの並び方や位置を考えて描いている。

Table 4-2 4歳における「表現の特徴」の性差

カテゴリ	男児		女児		χ^2 値
	人数	割合	人数	割合	
横並び型並列表現	13	20.6	41	71.9	31.81 **
積み重ね型並列表現	12	19.0	7	12.3	1.03 n. s.
一点拡大	14	22.2	13	22.8	0.01 n. s.
俯瞰	7	11.1	1	1.8	※0.04
カタログ	2	3.2	5	8.8	※0.18
その他	30	47.6	11	19.3	10.67 **

※fisher 直接確率計算法による

*p<.05 **p<.01

Table 4-3 5歳における「表現の特徴」の性差

カテゴリ	男児		女児		χ^2 値
	人数	割合	人数	割合	
横並び型並列表現	39	42.9	76	83.5	32.34 **
積み重ね型並列表現	13	14.3	11	12.1	0.19 n. s.
一点拡大	13	14.3	10	11.0	0.45 n. s.
俯瞰	7	7.7	1	1.1	※0.03
カタログ	7	8.0	6	6.9	0.08 n. s.
その他	39	42.9	15	16.5	15.17 **

※fisher 直接確率計算法による

*p<.05 **p<.01

Table 4-4 4歳における「描いた位置」の性差

カテゴリ	男児		女児		χ^2 値
	人数	割合	人数	割合	
上部	1	1.6	4	7.0	※0.15
下部	1	1.6	1	1.8	※0.73
右または左	2	3.2	7	12.3	※0.06
中心	4	6.3	2	3.5	※0.39
バランスの取れた	28	44.4	32	56.1	1.64 n. s.
その他	26	41.3	17	29.8	1.71 n. s.

※fisher 直接確率計算法による

Table 4-5 5歳における「描いた位置」の性差

カテゴリ	男児		女児		χ^2 値
	人数	割合	人数	割合	
上部	5	5.5	3	3.3	0.52 n. s.
下部	3	3.3	3	3.3	※0.66
右または左	4	4.4	1	1.1	※0.18
中心	3	3.3	2	2.2	※0.50
バランスの取れた	50	54.9	68	74.7	7.81 **
その他	32	35.2	19	20.9	4.60 *

※fisher 直接確率計算法による

* $p < .05$ ** $p < .01$

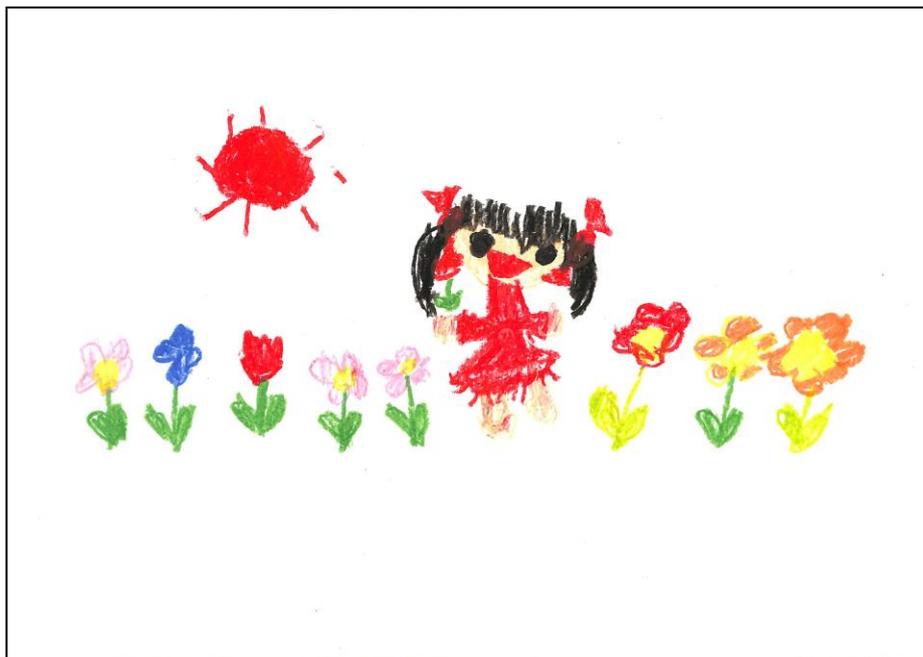


Fig. 4-2 女児の「横並び型並列表現」による構図
(上：5歳、下：4歳)



Fig. 4-3 「バランスのとれた」構図
(上：5歳男児、下：5歳女児)

第4節 考察

山田（2018）によると、構図は幼児間で模倣することがよく見られると指摘しているように、モチーフだけではなく、構図も類似した傾向がみられる可能性が考えられる。皆本（1981）が5、6歳を対象とした自由画の構図の調査では、女兒は「横並び型並列表現」に地面を表す基底線を描くという特有の表現をすること、男児は「積み重ね型並列表現」が多く、構図の種類は複数に渡ったとの結果を報告している。新井（2001）も女兒の自由画の構図の特徴として、同一平面上に並列的にモチーフを描くことを挙げている。それらのことから女兒の自由画の構図に多くみられる「横並び型並列表現」は普遍的であることが示唆された。男児は、4歳では分散傾向があるが、5歳では「横並び並列表現」が増えた。5歳は基底線を意識するようになり（中尾，2008）、基底線に沿った「横並び並列表現」が増えることが考えられる。

「描いた位置」による構図では、男女とも「バランスが取れて」描けている幼児が多く、画用紙上に偏りのある構図の幼児は少なかったが、5歳になると女兒は男児より「バランスが取れて」描いていた。それは「横並び型並列表現」の多くに、地面を表す基底線や画用紙の下端を基底線と見立てて描かれる傾向がみられており、そのため、画面全体に安定感があり「バランスが取れて」描かれた構図となっていることが影響していると推察される。

第5章

幼児の自由画の構成要素にみられる性差の特徴

第1節 目的

保育者が幼児の描画を見るとき、「色彩」や「モチーフ」だけに留まらず、描画の構成要素と考えられる「描写力」「自由さ」「構図」「主題」「着想」「技法」などから描画を読み取ろうとしたり、指導を行ったりする場合がある（石川，2006）。本章では、幼児の描画指導の際に用いられる観点に沿って、幼児の自由画の構成要素について評定項目を設定した。本章では、造形教育の専門家が評定項目ごとに評価することで、男児と女児それぞれの自由画の特徴について明らかにすることを目的とする。

第2節 方法

1. 分析の対象

茨城県及び東京都の幼稚園2園と保育所8園の計10園に通う、4歳児クラス（以下、4歳）63名、女児57名、5歳児クラス（以下、5歳）男児91名、女児91名、計302名の描いた自由画を分析の対象とした。

自由画は各園の一斉活動の中で描くこと、また保育者が幼児に自由に絵を描くことを伝えることを園に筆者が直接依頼した。

自由画は八つ切りの画用紙1枚に描かれた。描画材は各園で使用している16色のクレヨンを使った。

自由画の収集は2014年12月から2015年3月に行った。

本研究は、2014年12月5日に和洋女子大学ヒトを対象とする生物学的研究・疫学的研究に関する倫理委員会の承認（受付番号：第1413号）を受けた。

2. 評定の方法

（1）評定項目

石川（2006）は小学生の描画に対する評価の観点をもとに、幼児や児童の絵の見方として10項目を取り挙げている。その10項目では、①描写力：描写力が正確でしっかりしている、②自由さ：心にこだわりがなく、自由にのびのびと描いている、③主題：絵のテーマに沿って表したいことがしっかりと描かれている、④構成：物と物との配置、組み合わせがたくみである、⑤着想：発想が新鮮で個性的な表現をしている、⑥情感：詩的な雰囲気が漂い、幻想的、空想的に描かれている、⑦誠実さ：表現の仕方が誠実で、はったりがない、⑧技法：筆使いや色ぬりが達者で器用にかけている、⑨内容：描きたいことがたくさん描かれている、⑩雰囲気：ほほえましさ、楽しさの感じられる絵である、と示されている。

その10項目の中で幼児の自由画の特徴を見出すにふさわしいと考えられる6項目「描

写力」「自由さ」「主題」「構成」「着想」「技法」に、クレヨンによる自由画の要素として不可欠な「色彩」を加えた7項目を評定項目として設定した。なお、これらの評定項目を自由画の要素として考えた場合に、技術面として「色彩」「描写力」「技法」「構成」、創造性として「着想」「自由さ」、そして「主題」という3つの要素に分けた。

また、各項目の評定内容も、小学生と幼児では作品の評価や指導方法が異なることから、石川（2006）の描画に対する評価の観点を修正し、評価をすることにした。また、幼児の評価や指導については、以下の観点が重要視されている。

「色彩」：色彩表現の美しさや表現としてコントロールできている（斉藤，2005）

「描写力」：創作としての技能が優れている（山田，2008）

「技法」：イメージに合った表現技法を見つけたり試したりすることができる

（福岡市教育センター 図画工作・美術科研究室，2013）

「構成力」：描こうとする面積につりあった表現する力が備わっている（古賀，2011）

「自由さ」：色や形を自由に探索したり表現したりすることができる（古賀・初田・寺元，2015）

「着想」：造形表現に関する発想がみられる（古賀，2014）

「主題」：感動したことやものを描いている（岩見，2017）

上記を考慮して、評定項目を Table 5-1 とした。

（2）手続き

幼児の造形教育を専門とする筆者を含む大学教員の30代男性2名、40代女性2名の計4名が、7つの項目について評定を行った。

幼児の自由画をスキャンし画像を取り込んだUSBメモリと採点表を評価者に渡した。評価者には、4、5歳の自由画であることのみを伝え、その自由画を何歳の幼児が描いたかについては伝えていない。また、それ以外の情報は伏せた。評定者は、それぞれがパソコン上で評定項目に沿って1～5点の5点満点（点数が高い方が高く評価されていることを示す）で評定を行い、4人の平均点をその自由画の得点とした。

（3）評定期間

2016年3月から5月に評定を行った。

Table 5-1 評定項目の内容

系統	項目	内 容
技術面	色彩	描きたい表現と色の使い方が合致し、コントロールできている
	描写力	描写力が備わり、描きたいものを描いている、描こうとしている、とする。 伝えたいことが、描き表す技能が優れている
	技法	クレヨンの筆致や色のぬり方が巧みで器用に描けている。 イメージに合った筆致やぬり方に工夫がみられる。
	構成	物と物との配置、組み合わせがたくみであり、配置に工夫がみられる。 物と物の組み合わせを工夫し、空間を意識している。
創造性	自由さ	心にこだわりがなく、色や形を使って自由にのびのびと描いている。
	着想	発想が新鮮で個性的な表現をしている。
主題	主題	自身の描きたい絵のテーマに沿って表したいことがと描けている。

第3節 結果

1. 評価の内容

4歳124名（男児67名、女児57名）および5歳182名（男児91名、女児91名）の自由画を4名の幼児の造形を専門としている研究者が7つの項目についてそれぞれ評定した。いくつかの自由画について、どのように評価されたのかを評定項目に従いながら紹介する。

（1）4歳男児の自由画

この自由画の評定平均は、「色彩」3.25、「描写力」2.25、「構成」3.00、「技法」2.75、「自由さ」4.00、「着想」3.00、「主題」2.25であった（Fig. 5-1）。まだ、具体的に描き表すことができていないことから「描写力」が低く、「技法」を駆使した表現はみられなかった。しかし、のびやかな線の動きが「自由さ」として高く評価されたと思われる。

（2）5歳男児の自由画

5歳男児のこの自由画の評定平均は、「色紙」3.75、「描写力」4.25、「構成」3.25、「技法」3.50、「自由さ」3.00、「着想」2.75、「主題」4.00であった（Fig. 5-2）。何を描いているのか伝わりやすいことから「描写力」や「主題」が高い評定となった。描いている主題や対象がわかりやすい一方で、のびのびとした「自由さ」や個性的な「着想」といった「創造性」の観点においては高い評定にはならなかったと思える。

（3）4歳女児の自由画

この自由画の評定平均は、「色彩」3.00、「描写力」4.00、「構成」3.75、「技法」2.75、「自由さ」4.25、「着想」3.50、「主題」3.75であった（Fig. 5-3）。何を描いているのかわかりやすいこと、描かれたクマに動きが感じられること、ストーリー性を感じさせる画面構成から、「主題」「描写力」「構成」がやや高い評価となったと思われる。一方、表現に応じたぬり方などの工夫は特になかったことから、「技法」の評定はやや低くなったのであろう。

（4）5歳女児の自由画

キリンや花などが複数描かれたこの自由画は、「色彩」4.00、「描写力」3.00、「構成」4.25、「技法」3.75、「自由さ」3.50、「着想」3.75、「主題」3.25の評定平均であった（Fig. 5-4）。描いているキリン、花、ひとなどが、伝わりやすい色で表現されていることから「色彩」が高い評定となったと思われる。一方、キリンを見ている様子を表す「構成」、表現したいことに応じた「色彩」、工夫がみられるぬり方がされていた「技法」、がやや高い

評定となった。

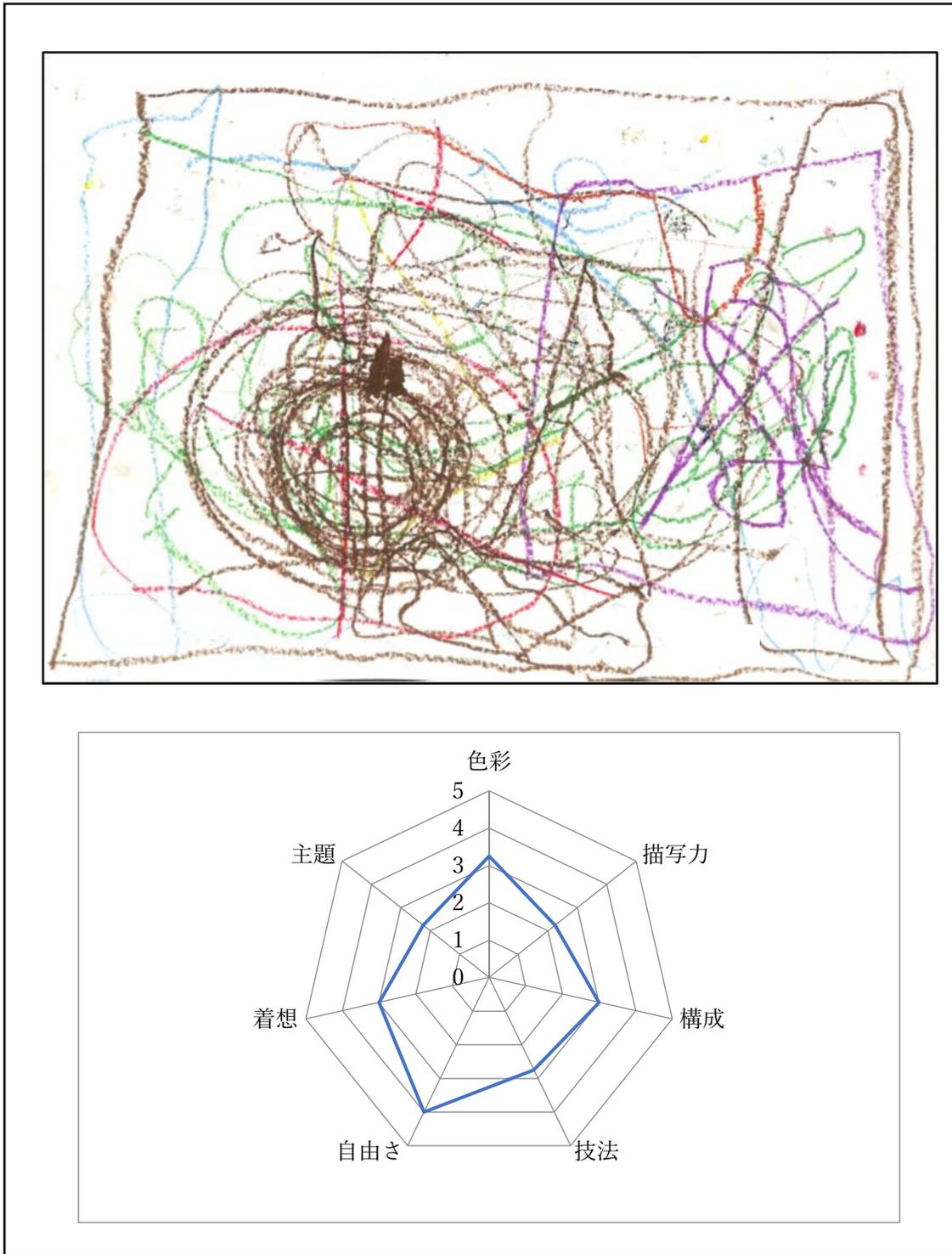


Fig. 5-1 4歳男児

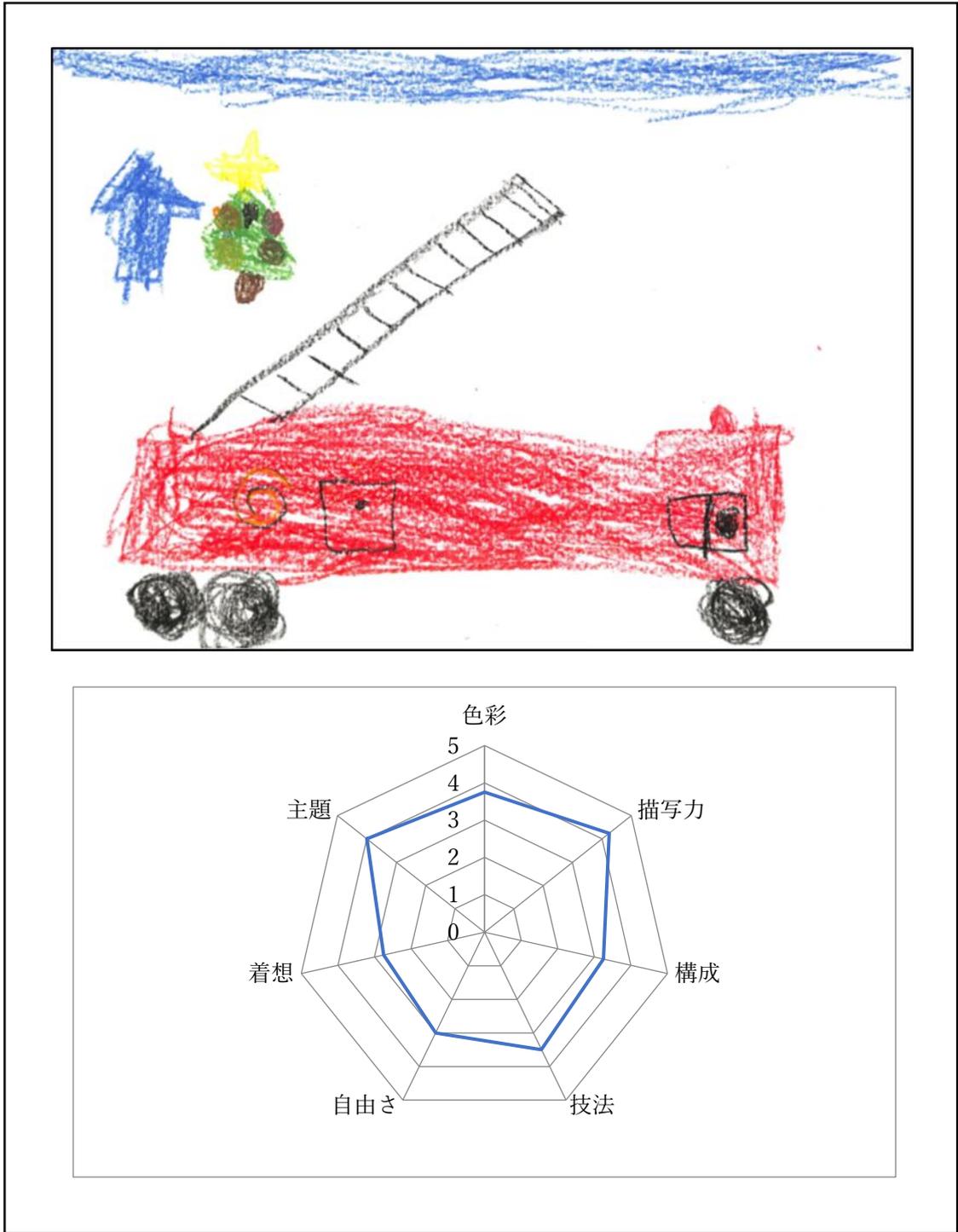


Fig. 5-2 5歳男児

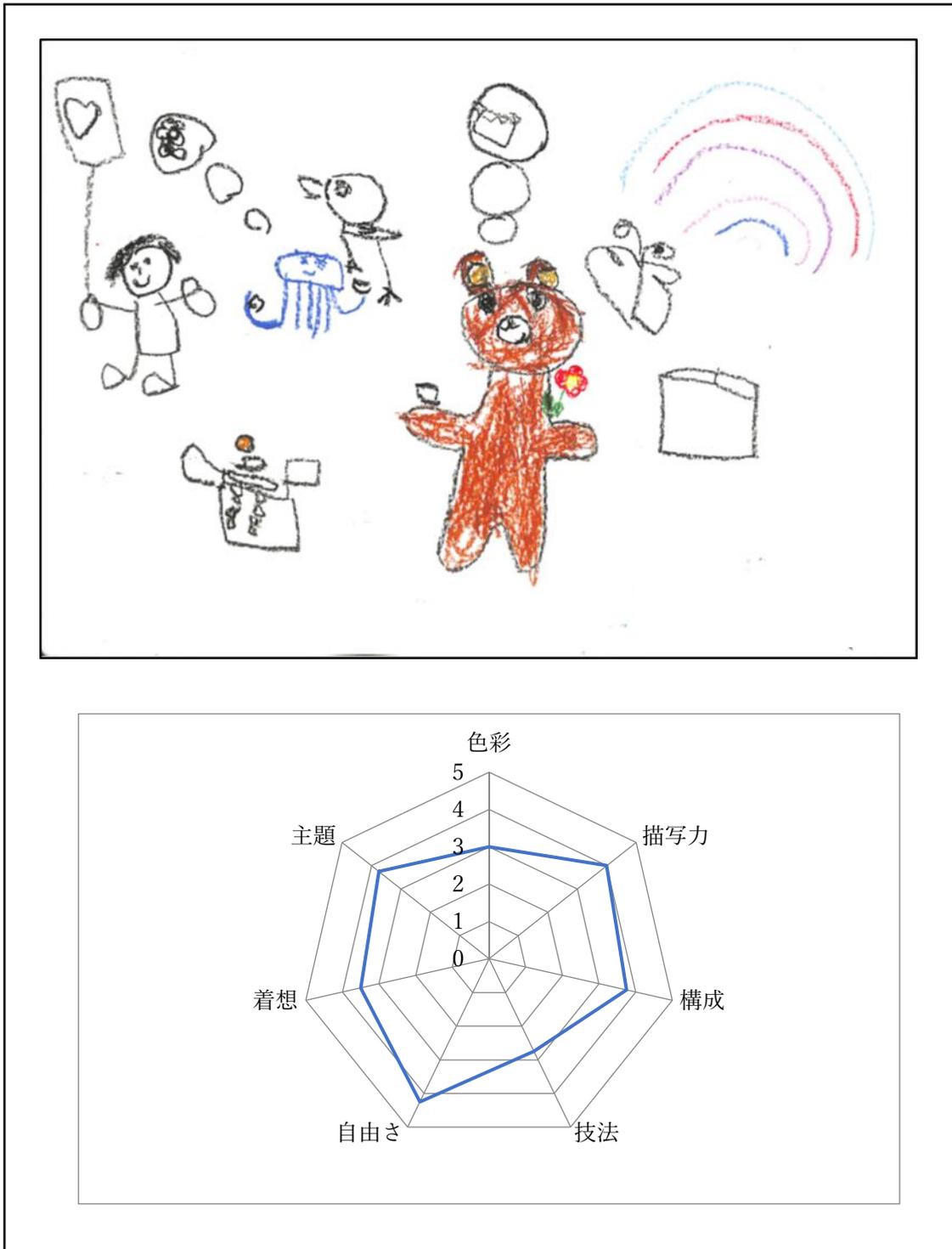


Fig. 5-3 4歳女兒

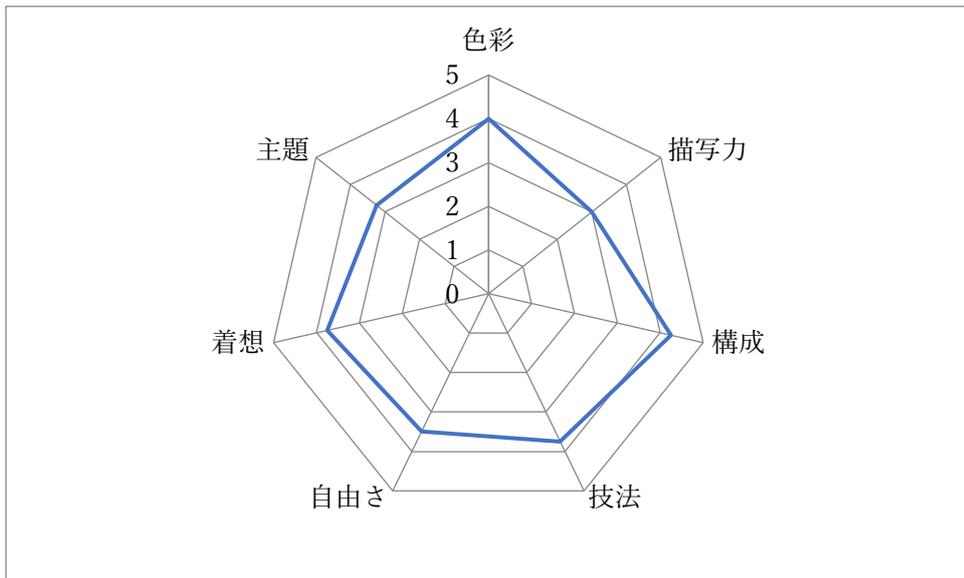


Fig. 5-4 5歳女兒

2. 性別および学年からみた評価

4名の評価者間の信頼性を測定したところ、「色彩」 $\alpha = 0.70$ 、「描写力」 $\alpha = 0.78$ 、「構成」 $\alpha = 0.62$ 、「自由さ」 $\alpha = 0.57$ 、「着想」 $\alpha = 0.56$ 、「主題」 $\alpha = 0.56$ であり、美術作品に対する評価視点から考えると、ある程度の一致率が認められたと言えよう。

性別、学年を独立変数、4名の評価者による各得点の平均値を従属変数とした2要因の分散分析を行った結果（Table 5-2）、すべての項目において交互作用は認められなかった。

（1）技術面

「色彩」「描写力」「技法」において、性別、学年それぞれに主効果が認められた。つまり、「色彩」「描写力」「技法」は4歳、5歳共に女兒の方が高く評価されていた。その一方で、男女ともに年齢が長じるにつれて得点が高くなった。なお、女兒は4歳も5歳も7つの評定項目のうちで、「色彩」が最も高く評定されていた。

「構成」においては、性別、学年ともに主効果が認められず、発達に伴って評価が高まるわけでも、性別による差が認められるわけでもないことが確認できた。

（2）創造性

「自由さ」においては、性別、学年ともに主効果は認められなかった。一方、「着想」においては性別のみに主効果が認められた。「着想」は女兒の方が男児よりも有意に評価が高いことがわかった。

（3）主題

「主題」については、性別、学年それぞれに主効果が認められた。4歳も5歳も女兒の方が男児よりも評価が高いが、どちらも学年が上がると高く評価されるようになっていた。なお、男児は4歳も5歳も7つの項目のうちで「主題」が最も高く評価されていた。

Table 5-2 性別および学年からみた評価

系統	項目		男児		女児		F 値
			平均	標準偏差	平均	標準偏差	
技術面	色彩	4 歳児	3.05	0.60	3.50	0.56	0.30
		5 歳児	3.37	0.65	3.90	0.47	
	描写力	4 歳児	3.01	0.77	3.42	0.62	0.08
		5 歳児	3.19	0.65	3.65	0.55	
	構成	4 歳児	3.10	0.70	3.18	0.60	0.47
		5 歳児	3.01	0.70	3.16	0.61	
	技法	4 歳児	2.86	0.65	3.21	0.51	0.64
		5 歳児	2.96	0.63	3.42	0.54	
創造性	自由さ	4 歳児	3.14	0.73	3.02	0.65	2.85
		5 歳児	2.99	0.72	3.13	0.54	
	着想	4 歳児	3.08	0.66	3.22	0.51	0.46
		5 歳児	2.98	0.59	3.22	0.48	
主題	主題	4 歳児	3.16	0.66	3.36	0.56	0.47
		5 歳児	3.43	0.58	3.71	0.51	

4 歳児男児 n=63、4 歳児女児 n=57

5 歳児男児 n=91、5 歳児女児 n=91

第4節 考察

女兒は、「色彩」において、4歳も5歳も7つの評定項目の中でもっとも平均得点が高く、男児よりも有意に高く評価された。皆本（1979）は、女兒が自由画を描く際に色を多く使う傾向があり、そのことが色彩への関心の高さを指摘している。本調査でも、幼児自身が表現したいことにふさわしい「色彩」を選択することが求められる自由画において、女兒が男児よりも高い評価を受けた。

「描写力」についても女兒の方が高い得点であった。郷間・川越・立田・中市・郷間・鈴木・落合（2013）による図形模写や描写力テストでも、女兒が男児を上回る結果が得られていることから、この時期では女兒の方が描く技術が備わっており、男児はまだ描きたいものを表す技術が身につけていない傾向があることが考えられた。

クレヨンならでのぬり方や筆致、工夫といった「技法」についても、女兒の方が評価が高かった。尾崎・古賀・金子・武井（2010）が女兒の方が男児よりも発達推移が早いと報告しており、本研究においても、女兒は色をぬることが巧みであること、さらにぬり方だけではなく描きたい表現に応じた筆致の変化や工夫も得意であることが推測される。

「自由さ」や「着想」は描く技術とは異なり、幼児なりの考えや思いを表現する創造性を評定の観点としている。「自由さ」においては性差が認められなかった。男児は7つの項目のうちで比較的高い点数であるのに対して、女兒のなかでは比較的低い。つまり、女兒の自由画を全体的にみると、描き方に「自由さ」に課題があることが示唆されると思われる。

「主題」でも女兒の方が男児よりも平均点が高いことから、女兒は描きたいことが明確であることがわかる。描きたいことを表す技術も女兒の方が評価が高かったことが、「主題」の伝わりやすさにつながったと思われる。一方、男児は7つの項目のうちで「主題」の平均値がもっとも高く評価された。描きたいことを表す技術が高まることによって、より「主題」が評価されることになるかと推測される。

「色彩」「描写力」「技法」「主題」については性別を問わず年齢とともに描くための技術が向上していると考えられた。一方、「構成」と「自由さ」については性別においても年齢においても差が認められなかった。つまり、これらの項目については、描く技術の向上や性別には影響を受けないと言える。

第6章

家庭における幼児の描画と性差

第1節 目的

幼児の自由画について第2章（研究1）から第4章（研究3）の量的調査研究による分析の結果、「色彩」、「モチーフ」、「構図」において性差が認められた。また、第5章（研究4）の造形教育の専門家たちによる自由画の評価に関する調査研究では、7つの評定項目のうち「色彩」、「描画力」「技法」「着想」「主題」において、女児の方が男児よりも平均点が高いということが明らかになった。

一方で、幼児の発達には保護者の影響、特に母親の影響が大きいこと（尾久，2014）や、造形表現は、保護者とのふれあいの時間の長さや幼児自身の造形表現活動を経験する時間が関係することが指摘されている（藤淵，2013）。つまり、幼児の造形表現には、家庭で造形に関する遊びの機会の確保や、幼児の表現に対する保護者の理解と態度、さらに教育方針が、幼児の造形表現に影響を与えていることが推測できる。

そこで本研究では保護者に質問紙調査を行い、家庭における描画遊びや保護の関わり、教育方針などについて把握することを目的とする。

第2節 方法

1. 調査対象者

茨城県及び東京都の幼稚園や保育所に通う幼児の保護者 302 名を調査対象とした。

2. 手続き

（1）調査手続き

無記名、自記式による質問紙調査を行った。園児の在籍する幼稚園や保育所の園長を通じて、研究目的と方法について文書にて保護者へ説明し、質問紙の配布を行った。質問紙の回収は、各園の担任を通じて回収した。

（2）調査項目

調査項目は家庭での描画遊びの様子や保護者の子育てや教育観などについて 27 項目を設定した。

（3）調査時期

調査は 2014 年 12 月から 2015 年 3 月に実施した。

（4）倫理的配慮

本研究は、2014 年平成 26 年 12 月 5 日に和洋女子大学ヒトを対象とする生物学的研究・疫学的研究に関する倫理委員会の承認（受付番号：第 1413 号）を受けた。調査対象

者には、研究の目的、研究参加の自由、得られたデータは研究目的以外に使用しないこと、調査協力の同意は質問紙の提出をもって得ることとした。

第3節 結果

1. 回答者と対象児の属性幼児との続柄と家族構成

回答者には、園を通じて質問紙を持って帰ってきた子ども（以下、対象児）について答えてもらった。

回答者の続柄と対象児の性別について尋ねた結果、「母親」94.7%（286名）、「父親」5.0%（15名）、「その他」0.3%（1名）であった。また、対象児の性別は男児51.0%（154名）、女児49.0%（148名）であった。

対象児が同居している家族構成について尋ねたところ「母親」は男児100%（154名）、女児99.3%（147名）、「父親」は男児92.2%（142名）、女児89.9%（133名）、「姉」は男児35.1%（54名）、女児29.1%（43名）、「祖母」は男児31.2%（48名）、女児29.7%（44名）%、「兄」は男児31.8%（49名）%、「妹」は男児26.0%（40名）、女児27.0%（40名）、「弟」は男児25.3%（39名）、女児23.0%（34名）、「祖父」は男児26.0%（40名）、女児20.3%（30名）、「その他の親族」は男児6.5%（10名）、女児5.4%（8名）であり、「親族以外と同居している」幼児はいなかった。

対象児のきょうだいの人数については、「いない」が最も多く、男児68.2%（105名）、女児74.3%（110名）であった。「1名」男児24.7%（38名）、女児19.6%（29名）、「2名」男児6.5%（10名）、女児5.4%（8名）、「3名」がいる男児0.6%（1名）、女児0.7%（1名）であった。

2. 保護者が推測する対象児の好きな色

保護者に、対象児の好きな色について自由記述式で尋ねた。1番目と2番目に挙げた好きな色を合算し、幼児の性別ごとにTable 6-1に示した。回答の色名は和名と洋名であっても同一の色と判断し集計した。例えば、「桃色」と「ピンク」は同一色とみなす。

その結果、男児は「青」55.8%（86名）、次いで「赤」43.5%（67名）、緑27.3%（42名）であった。女児は「ピンク」79.1%（117名）、次いで「水色」31.8%（47名）、「黄色」21.6%（32名）、「紫」20.3%（30名）であった。

3. 母親の好きな色

（1）母親の好きな色

母親の好きな色について尋ねた。なお、母親が不在の家庭のデータを除いた。また、

父親が回答している場合には、父親から母親に尋ねて回答してもらった。1番目と2番目に挙げた好きな色を合算し、対象児の性別ごとに Table 6-2 に示した。

その結果、男児を持つ母親の最も好きな色は「ピンク」38.3% (59名)、次いで「赤」18.8% (29名)、「橙」16.9% (26名)、「緑」15.6% (25名)であった。女兒を持つ母親の最も好きな色は「ピンク」29.1% (43名)、次いで「青」22.3% (33名)、「紫」17.6% (26名)、「緑」17.0% (25名)であった。

(2) 母親の好きな色を幼児は知っているか

母親の好きな色を幼児は知っているかどうかについて尋ねた。男児を持つ母親は50.6% (78名)、女兒を持つ母親は69.4% (102名)が、全体では59.8% (180名)の幼児が母親の好きな色を知っていると回答した。

4. 家庭での対象児の描画

(1) 描画の頻度

家庭での対象児の描画の頻度について、「毎日」「週2、3回」「週1回」「月に数回」「ほとんどない」の5件法で尋ねた結果を Table 6-3 に示した。

家庭における男児の描画の頻度について、最も多かった回答は「週2、3回」35.1% (54名)、次いで「月に数回」23.4% (36名)、「週1回」16.9% (26名)、「毎日」14.9% (23名)であった。女兒の描画の頻度について最も多い回答は「毎日」42.6% (63名)、次いで「週2、3回」41.9% (62名)であった。男児よりも女兒の方が家庭で描画の頻度が多いことがわかった。

(2) 保護者との描画の頻度

家庭における対象児と保護者との描画の頻度について「毎日」「週2、3回」「週1回」「月に数回」「ほとんどない」の5件法で尋ねた結果を Table 6-4 に示した。

保護者との描画の頻度について男児の回答で最も多かったのは「月に数回」42.3% (65名)、次いで「ほとんど描かない」27.9% (43名)、「週1回」16.2% (25名)、「週2、3回」11.7% (18名)、「毎日」1.9% (3名)であった。女兒の回答で最も多かったのは、「月に数回」35.8% (53名)、次いで「週1回」24.3% (36名)、「ほとんど描かない」18.9% (28名)、「週2、3回」16.9% (25名)、「毎日」4.1% (6名)であった。家庭で対象児は常に保護者と一緒に描画遊びをしているわけではないが、家庭で対象児が描画を行っていることを回答者が把握していることがうかがえた。

(3) 描画のモチーフ

幼児が家庭でどのような絵を描くことが多いかについて、自由記述式で具体的に答え

を求めた。得られた回答の1番目から3番目までについて、第3章で用いた Table 3-1 (自由画のモチーフのカテゴリの分類) に沿って「自然(花以外)」「ひと」「装飾」「花」「キャラクター」「生き物」「家」「乗り物」「その他」「不明」の10カテゴリから「不明」を除いた9カテゴリに分類し、性別による割合を Table 6-5 に示した。

その結果、男児で最も回答率の高いモチーフのカテゴリは「ひと」48.7% (75名)、次いで「キャラクター」42.2% (65名)、「乗り物」17.5% (27名)、「生き物」15.6% (24名)であった。女児で最も使用率の高いモチーフのカテゴリは「ひと」88.5% (131名)、次いで「キャラクター」と「花」がそれぞれ23.6% (35名)、「生き物」18.2% (27名)、「装飾」14.9% (22名)であった。

5. 保護者との描画遊びの方法

(1) 描画の教え方

保護者が対象児の性別によってどのように描き方を教えているのかについて尋ねた。「手本を描いてみせる」「手をとって描き方を教える」「言葉だけで描き方を教える」「描く順番を教える」「色のぬり方を教える」「色をぬる順番を教える」「ものの大きさを描けるように教える」「描くものを実際に見せる」「描くものの写真や図鑑などを見せる」「鉛筆やクレヨン、サインペンなどの持ち方を教える」「ぼかし方や重ねぬりなどの技法を教える」「描き方のDVDなどの映像を見せる」「何もいわない」「その他」の項目から、複数選択にて回答を求めた結果を Table 6-6 に示した。

その結果、保護者が男児に教える描き方として最も回答が多かった項目は「手本を描いてみせる」43.5% (67名)、次いで「何もいわない」41.6% (64名)、「色のぬり方を教える」33.1% (51名)、「鉛筆やクレヨン、サインペンなどの持ち方を教える」29.2% (45名)であった。女児で最も多かった項目は「何もいわない」42.6% (63名)、次いで「お手本を描いてみせる」41.9% (62名)、「色のぬり方を教える」35.8% (53名)、「鉛筆やクレヨン、サインペンなどの持ち方を教える」20.3% (30名)であった。

(2) 描画の際の言葉がけ

対象児が描画の際、保護者が対象児にどのような言葉がけをしているのかについて尋ねた。描画の技術に重点を置いた言葉がけとして「上手に」「はみ出ないように」「バランスよく」「大きく」「細かく」「バック・背景も色をぬるように」「色を考えて」「大きさを考えて」「形を考えて」「どこを〇〇色にぬるよう話す」「〇〇を描いてみたら」、態度についての言葉がけとして「落ちついて」「ていねいに」「よく見て」「よく考えて」「集中して」、躰についての言葉がけとして「静かに」「汚さないで」「姿勢よくして」、描く気持ち高める言葉がけとして「好きなように」「元気よく」「かっこよく」「かわいらしく」「思いきって」「きれいに」、そして「何もいわない」「その他」から複数選択にて回

答を求めた。結果を Table 6-7 に示した。

その結果、男児に対する言葉がけで最も多かったのは「好きなように」48.1% (74名)、次いで「何もいわない」34.4% (53名)、「よく見て」14.9% (23名)、「大きく」13.6% (21名)であった。保護者が女児に対する言葉がけで最も多かったのは「好きなように」54.7% (81名)、次いで「何もいわない」41.2% (61名)であった。男児に対する言葉がけで多かった「大きく」が、女児に対しては4.1% (6名)と少数であった。この他、「かっこよく」という言葉がけをしていた保護者は、男児5.2% (8名)であったのに対して女児は全くなかった。「かわいらしく」と男児に言葉がけしている保護者は2.6% (4名)、女児は8.8% (13名)であった。

(3) でき上がった絵を見せにきたときの言葉がけ

対象児ができ上がった絵を見せにきたとき、保護者がどのような言葉がけをしているのかについて尋ねた。技術に重点を置いた言葉がけとして「上手に描けたね」「はみ出ないで描けたね」「バランスよく描けたね」「大きく描けたね」「細かく描けたね」「バック・背景も色をぬれたね」「色を考えて描けたね」「大きさを考えて描けたね」「形を考えて描けたね」、態度についての言葉がけとして「落ちついて描けたね」「ていねいに描けたね」「よく見て描けたね」「よく考えて描けたね」、躰についての言葉がけとして「静かに描けたね」「汚さないで描けたね」「姿勢よくして描けたね」「きちんと片付けようね」「手を洗ってきなさい」、描く気持ちを高める言葉がけとして「好きなように描けたね」「元気よく描けたね」「かっこよく描けたね」「かわいらしく描けたね」「思いきって描けたね」「集中して描けたね」「きれいに描けたね」、そして「その他」から複数選択にて回答を求めた結果を Table 6-8 に示した。

その結果、男児の保護者は「上手に描けたね」94.2% (145名)が最も多く、次いで「かっこよく描けたね」49.4% (76名)であった。女児の保護者で最も多い項目は「上手に描けたね」91.2% (135名)、次いで「かわいらしく描けたね」60.8% (90名)、「きれいに描けたね」34.5% (51名)であった。

(4) 保護者が期待する描画の効果

保護者が期待する描画の効果について尋ねた。表現力の項目として幼児の「個性が発揮されること」「想像力が豊かになること」「男の子らしさ女の子らしさを表現すること」、技術力の項目として幼児が「本物そっくりに描けるようになること」「色彩センスを身につけること」、躰にかかわる項目として幼児が「道具やものを大切に扱うようになること」「掃除やお片付けが上手になること」「静かに過ごすこと」、学力に結びつく項目として幼児の「手先が器用になること」「文字が書けるようになること」「集中力が身につくこと」、「その他」の選択肢を設けた。これらの中から、保護者が最も期待することに

ついて、また、複数選択による回答を求めた結果を Table 6-9 に示した。

その結果、描画に期待する効果として、「想像力が豊かになること」が最も多く、男児 56.5% (87 名)、女児 55.4% (82 名) であった。次いで男児には「集中力が身につくこと」、39.6% (61 名)、「個性が発揮されること」38.3% (59 名) が期待される効果であった。女児には「個性が発揮されること」41.2% (61 名)、「集中力が身につくこと」31.1% (46 名) であった。

6. 性差に関する子育ての考え

保護者に対して、性差に関する子育ての考えについて尋ねた。「男女を同じように扱って、男女の違いが生じないようにすべきである」「できるだけ男女は同じように扱うのがよいが、男女の身体的な違いには配慮すべきである」「女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく育つよう配慮すべきである」「子どもの自主性や子どもの個性を最優先すべきである」の4つの項目について、「非常にそう思う」5点、「ややそう思う」4点、「どちらともいえない」3点、「あまりそう思わない」2点、「全くそう思わない」1点とするリーカット尺度を用いて無回答を除いた各項目の平均値を算出した結果を Table 6-10 に示した。

その結果、の対象児の性別に関わらず項目の順位は同じであった。最も平均値が高い項目は、「できるだけ男女は同じように扱うのがよいが、男女の身体的な違いには配慮すべきである」男児 4.01 (0.81)、女児 4.22 (0.81) であり、次いで「子どもの自主性や子どもの個性を最優先すべきである」男児 3.91 (0.86)、女児 3.97 (0.88)、「男女を同じように扱って、男女の違いが生じないようにすべきである」男児 3.31 (0.96)、女児 3.39 (1.02)、「女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく育つよう配慮すべきである」男児 3.09 (0.90)、女児 3.12 (1.02) であった。どの項目も平均値は 3.0 以上であったことから、保護者は幼児の性差を認めながらも同等に扱うように心がけ、特に対象児の身体的な違いに配慮したいと考えていることが確認された。

第4節 考察

母親の最も好きな色は、幼児の性別にかかわらず「ピンク」であった。20～30代の女性の好きな色に「ピンク」系の色が上位に選ばれる調査結果（清澤，2014）からも、「ピンク」は成人女性の20～30代に好まれる色であり、女性特有の好きな色であると考えられる。今回の調査で母親が好きな色について男児よりも女児の方が知っているという結果が得られたが、このことは、母親との描画の頻度が女児は男児よりも多いことから、描画の際に好きな色について伝える機会があったことが推測できる。

家庭では男女とも「ひと」や「キャラクター」を描くことが多かった。園によっては「キャラクター」を描くことを望ましくないと考えていることも考えられるが家庭ではそのような制限はないと推測される。

保護者の描画の教え方については、幼児の性別による差はなく「手本を描いてみせる」「何もいわない」が多かった。しかし、幼児が絵を描いているときの保護者の言葉かけは、幼児の性別によって差が認められ、男児には「かっこよく」「大きく」、女児には「かわいらしく」と伝えていた。さらに、幼児が完成した絵を見せにきたとき保護者は、男児には「かっこよく描けたね」「大きく描けたね」、女児には「かわいらしく描けたね」「きれいに描けたね」と言葉かけをする傾向がみられた。保護者が描画に期待することの傾向は、幼児の性別を問わず類似していた。しかし、躰に関わる「静かに過ごすこと」を男児は期待されていることがうかがわれた。また、保護者の性差に関する子育ての考えについては、幼児の性差を認めながらも同等に扱うように心がけるが、身体的な違いに配慮したいと考えていた。一方で、男児の描画表現には「かっこよく」「大きく」を、女児には「かわいらしく」を求めたり認めたりする傾向がみられ、保護者による無意識に幼児の性別に応じた表現への導きが行われている可能性が示唆された。

Table 6-1 対象児の好きな色

色名	男児		女児	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)
青	86	55.8	17	11.5
赤	67	43.5	23	15.5
緑	42	27.3	6	4.1
黄色	18	11.7	32	21.6
水色	16	10.3	47	31.8
黒	16	10.3	2	1.4
紫	12	7.7	30	20.3
ピンク	8	5.1	117	79.1
橙	6	3.8	9	6.1
白	4	2.5	3	2.0
黄緑	2	1.2	3	2.0
紺	1	0.5	0	0.0
その他	11	7.0	2	1.4
無回答	19	13.0	5	3.4

男児の保護者n=154、女児の保護者n=148 重複回答

Table 6-2 対象児の性別ごとの母親の好きな色

色名	男児		女児	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)
ピンク	59	38.3	43	29.1
赤	29	18.8	17	11.6
橙	26	16.9	21	14.3
緑	25	15.6	25	17.0
青	24	15.8	33	22.3
黄色	23	15.1	15	10.2
水色	19	12.5	21	14.3
黒	18	11.8	15	10.2
紫	17	11.1	26	17.6
白	17	11.1	22	15.1
茶	7	4.6	9	6.1
黄緑	6	4.0	7	4.8
紺	3	1.9	8	5.4
グレー	3	1.9	4	2.7
肌色	0	0.0	2	1.4
その他	9	5.8	11	7.6
無回答	23	14.8	15	10.3

男児の保護者n=154、女児の保護者n=147 重複回答

Table 6-3 家庭における対象児の描画遊びの頻度

頻度	男児		女児	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)
週に2, 3回	54	35.1	62	41.9
月に数回	36	23.4	10	6.8
週1回	26	16.9	11	7.4
毎日	23	14.9	63	42.6
ほとんど描かない	14	9.1	0	0.0
無回答	1	0.6	2	1.3

男児の保護者n=154、女児の保護者n=148

Table 6-4 保護者との描画遊びの頻度

頻度	男児		女児	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)
月に数回	65	42.3	53	35.8
ほとんど描かない	43	27.9	28	18.9
週1回	25	16.2	36	24.3
週に2, 3回	18	11.7	25	16.9
毎日	3	1.9	6	4.1

男児の保護者n=154、女児の保護者n=148

Table 6-5 家庭での自由画にみられるモチーフの出現

カテゴリ	男児		女児	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)
ひと	75	48.7	131	88.5
キャラクター	65	42.2	35	23.6
乗り物	27	17.5	3	2.0
生き物	24	15.6	27	18.2
花	9	5.8	35	23.6
装飾	9	5.8	22	14.9
自然(花以外)	5	3.2	16	10.8
家	5	3.2	5	3.4
その他	37	24.0	16	10.8

男児の保護者n=154、女児の保護者n=148 重複回答

Table 6-6 保護者による絵の教え方と対象児の性別

項目	男児		女児	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)
手本を描いてみせる	67	43.5	62	41.9
何もいわない	64	41.6	63	42.6
色のぬり方を教える	51	33.1	53	35.8
鉛筆やクレヨン、サインペンなどの持ち方を教える	45	29.2	30	20.3
描くものの写真や図鑑などを見せる	26	16.9	19	12.8
描くものの描き方を教える	20	13.0	9	6.1
描くものを実際に見せる	17	11.0	21	14.2
手をとって描き方を教える	11	7.1	6	4.1
描く順番を教える	7	4.5	11	7.4
ものの大きさを描けるよう教える	5	3.2	7	4.7
色をぬる順番を教える	3	1.9	5	3.4
ぼかし方や重ねぬりなどの技法を教える	2	1.3	3	2.0
描き方のDVDなどの映像を見せる	1	0.6	0	0.0
その他	16	10.4	17	11.5

男児の保護者n=154、女児の保護者n=148 重複回答

Table 6-7 描画遊びにおける保護者の言葉がけと対象児の性別

項目	男児		女児	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)
好きなように	74	48.1	81	54.7
何もいわない	53	34.4	61	41.2
よく見て	23	14.9	11	7.4
大きく	21	13.6	6	4.1
ていねいに	20	13.0	16	10.8
はみ出ないように	18	11.7	15	10.1
姿勢よくして	18	11.7	8	5.4
色を考えて	11	7.1	13	8.8
思いきって	10	6.5	12	8.1
よく考えて	10	6.5	4	2.7
集中して	8	5.2	2	1.4
かっこよく	8	5.2	0	0.0
元気よく	6	3.9	5	3.4
大きさを考えて	6	3.9	3	2.0
かわいらしく	4	2.6	13	8.8
上手に	4	2.6	9	6.1
どこを〇〇色にぬるよう話す	3	1.9	3	2.0
バランスよく	2	1.3	5	3.4
きれいに	2	1.3	7	4.7
〇〇を描くよう話す	2	1.3	4	2.7
バック・背景も色をぬるように	2	1.3	2	1.4
落ちついて	2	1.3	2	1.4
汚さないで	1	0.6	5	3.4
静かに	1	0.6	0	0.0
形を考えて	0	0.0	2	1.4
細かく	0	0.0	0	0.0
その他	22	14.3	18	12.2

男児の保護者n=154、女児の保護者n=148 重複回答

Table 6-8 完成した絵に対する保護者の言葉がけと対象児の性別

項目	男児		女児	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)
上手に描けたね	145	94.2	135	91.2
かっこよく描けたね	76	49.4	9	6.1
よく見て描けたね	30	19.5	26	17.6
よく考えて描けたね	27	17.5	21	14.2
きれいに描けたね	21	13.6	51	34.5
きちんと片づけようね	21	13.6	15	10.1
かわいらしく描けたね	15	9.7	90	60.8
色を考えて描けたね	15	9.7	13	8.8
はみ出ないで描けたね	13	8.4	8	5.4
元気よく描けたね	12	7.8	7	4.7
大きく描けたね	12	7.8	3	2.0
ていねいに描けたね	11	7.1	15	10.1
細かく描けたね	10	6.5	10	6.8
バランスよく描けたね	8	5.2	6	4.1
好きなように描けたね	7	4.5	9	6.1
思いきって描けたね	5	3.2	3	2.0
バック・背景も色をぬれたね	4	2.6	3	2.0
集中して描けたね	4	2.6	6	4.1
姿勢をよくして描けたね	3	1.9	2	1.4
手を洗ってきなさい	3	1.9	2	1.4
大きさを考えて描けたね	2	1.3	0	0.0
静かに描けたね	1	0.6	1	0.7
形を考えて描けたね	1	0.6	4	2.7
汚さないで描けたね	1	0.6	0	0.0
落ちついて描けたね	0	0.0	2	1.4
その他	22	14.3	11	7.4

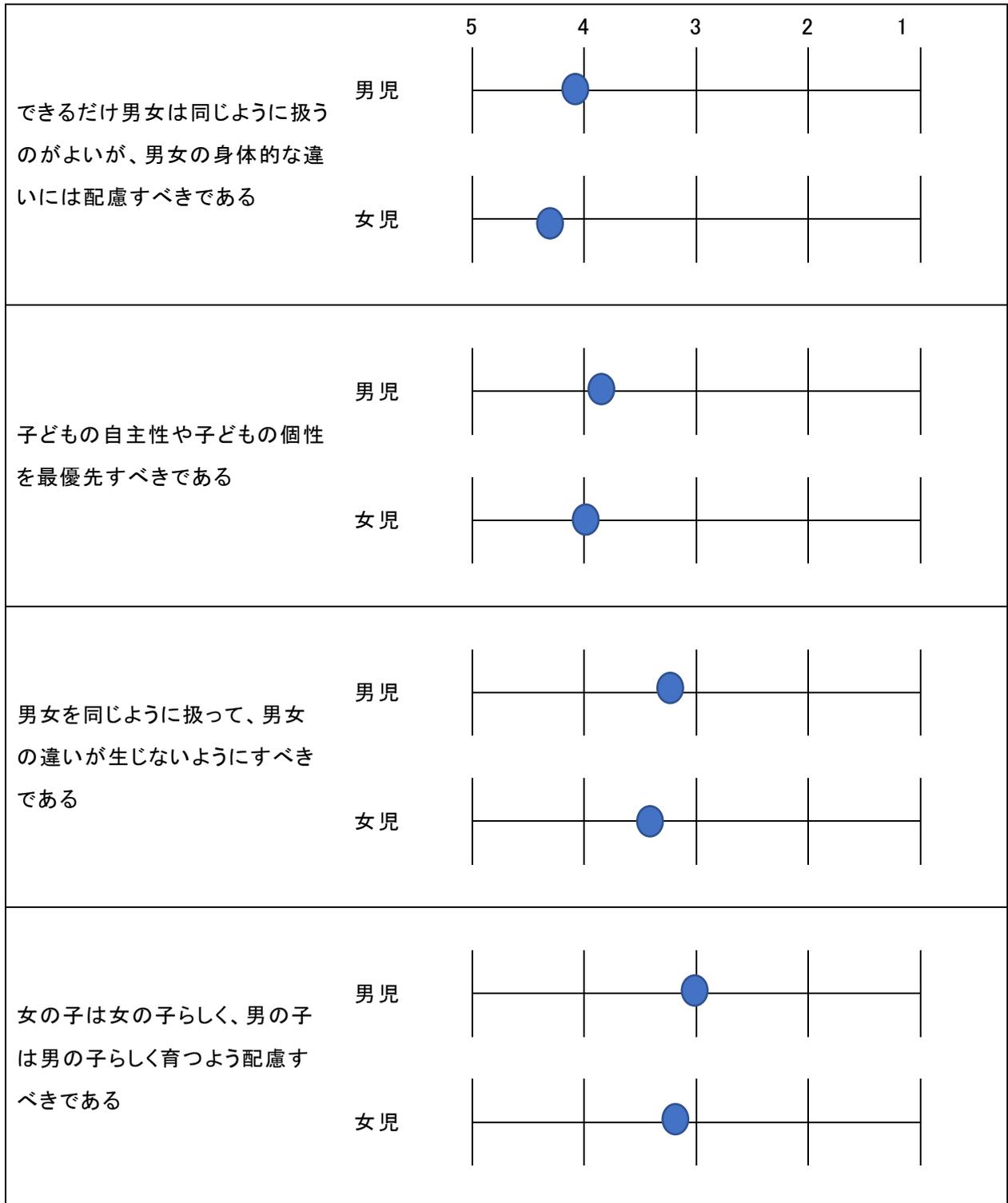
男児の保護者n=154、女児の保護者n=148 重複回答

Table 6-9 描画に期待する効果

項目	期待すること			
	男児		女児	
	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)
想像力がつくこと	87	56.5	82	55.4
個性が発揮されること	59	38.3	61	41.2
集中力がつくこと	61	39.6	46	31.1
色彩センスを身につけること	39	25.3	35	23.6
手先が器用になること	32	20.8	19	12.8
道具やものを大切に扱うようになること	26	16.9	35	23.6
文字が上手に書けるようになること	18	11.7	12	8.1
男の子らしさ女の子らしさを表現できること	10	6.5	5	3.4
掃除やお片づけが上手になること	12	7.8	12	8.1
本物そっくりに描けるようになること	7	4.5	3	2.0
静かに過ごすこと	5	3.2	0	0.0

男児の保護者n=154、女児の保護者n=148 重複回答

Table 6-10 保護者の性差に関する子育ての考え



男児の保護者n=154、女児の保護者n=148 「非常にそう思う」(5)～「全くそう思わない」(1)

●は平均値を示す

第 7 章

総 括

第1節 各研究のまとめ

研究1から研究5において、確認されたことを以下にまとめる。

研究1では「幼児の自由画の色彩による性差の特徴」を把握するために、使用されている色彩の色数や使用量について分析を行った。その結果、使用色数は男児よりも女児の方が多くことが確認された。使用量については、4歳では男児は女児よりも「赤」の使用量が多く、女児は男児よりも「肌色」「茶色」「ピンク」の使用が多いことが確認された。5歳では、女児が男児よりも「ピンク」「肌色」「茶色」「黒」が多いことが確認された。特徴的な色の使われ方としては、男児は建物などの広い面積を「赤」で使用していた。女児は「ピンク」は洋服や装飾や模様のような表現にも使われ、ひとを描くときに「肌色」、髪や顔などを「茶色」「黒」で描くほか、「茶色」は地面や木、家などに使用していた。

研究2では「幼児の自由画に描かれたモチーフの性差の特徴」を明らかにするために、モチーフを10カテゴリに分類した。その結果、カテゴリ数では4歳では女児が男児よりも「自然(花以外)」「装飾」が多く、男児は女児よりも「不明」が多いことが確認された。5歳では、男児が女児よりも「乗り物」「不明」が多く、女児は男児よりも「ひと」「装飾」「生き物」「花」が多いことが確認された。性差が認められたカテゴリ数は4歳では10カテゴリのうち3カテゴリ、5歳では6カテゴリで、5歳は4歳に比べ、性差が認められたカテゴリが多いことが明らかとなった。

研究3の「幼児の自由画の構図にみられる性差の特徴」では、自由画の構図を「描画表現の特徴」と「描いた位置」の2つに分け、分析を行った。構図における「表現の特徴」では、4歳、5歳ともに、女児は男児よりも「横並び型並列表現」が多く、男児は女児よりも「その他」が多いことが確認された。「描いた位置」については、4歳ではどのカテゴリについても性差が認められなかった。5歳は男児は女児よりも「バランスの取れた」「その他」が多いことが確認された。

研究4では、幼児の造形教育の4名の研究者の評定によって「幼児の自由画の構成要素にみられる性差の特徴」について分析を行った。その結果、技術面の「色彩」「描写力」「技法」は、4歳、5歳共に女児の方が男児よりも高く評価されていた。創造性では「着想」において、女児が男児よりも高い評価であった。「主題」については、男女とも4歳よりも5歳の方が評価が高く、どちらの学年も女児が男児よりも高く評価されていた。男児は4、5歳ともに7つの項目のうち「自由」の評価が最も高く、女児では他の項目

よりも低い評価であった。

研究5の「家庭における幼児の描画と性差」では、保護者に家庭での描画遊びや幼児の性差に関する考えなどについて、質問紙調査を行った。

保護者にその子ども（対象児）の好きな色を尋ねた結果、上位から男児は「青」「赤」「緑」、女児は「ピンク」「水色」「黄色」「紫」であった。男児を持つ母親も女児を持つ母親も「ピンク」を好み、男児の半数、女児の7割が母親の好きな色を知っていると回答した。

対象児の家庭での描画の頻度に尋ねたところ、男児は「週2、3回」が、女児は「毎日」が多く、男児よりも女児の方が家庭での描画の頻度が高いことがわかった。家庭での保護者と対象児の描画の頻度については、男女ともに「月に数回」という回答が最も多く、保護者と一緒に描画遊びはしているわけではないが、家庭で対象児が描画遊びをしている様子が見えたと回答した。

家庭での描画遊びで対象児が描くモチーフの上位は、男児は「ひと」「キャラクター」「乗り物」、女児は「ひと」「キャラクター」「花」であった。

対象児に対する保護者の描画の教え方について尋ねたところ、男児に対しては「手本を描いてみせる」「何もいわない」「色のぬり方を教える」、女児に対しては「何もいわない」「手本を描いてみせる」「色のぬり方を教える」の順に回答が多かった。描画の際、保護者の対象児への言葉がけについては、対象児の性別に関わらず「好きなように」「何もいわない」が共通して上位であった。少数ではあるが、男児に対する「大きく」「かっこよく」、女児には「かわいらしく」という回答もみられた。対象児ができ上がった絵を見せにきたときの保護者の言葉がけについては、男児に対して「上手に描けたね」「かっこよく描けたね」、女児に対して「上手に描けたね」「かわいらしく描けたね」「きれいに描けたね」が上位であった。

保護者が期待する描画の効果について尋ねたところ、対象児の性別に関わらず「想像力が豊かになること」が最も多く、次いで男児に対しては「集中力が身につくこと」「個性が発揮されること」、女児に対しては「個性が発揮されること」「集中力が身につくこと」であった。

保護者に性差に関する子育ての考えについて尋ねたところ、幼児の性別に関わらず性差を認めながらも同等に扱うように心がけ、特に身体的な違いに配慮したいと考えていることが確認された。

第2節 総合考察

本研究では幼児の造形表現における性差の特徴を明らかにするために、自由画の色彩、モチーフ、構図、幼児の造形教育の専門家による自由画の評定、保護者に対して家庭での描画遊びや教育方針などについて調査を行った。本節ではこれらの調査結果から、幼児の造形表現における性差について考察する。

自由画の使用色数は男児よりも女児が多く、男児と女児とでは使用色にも差があることが認められた。使用色数が男児よりも女児の方が多きことは皆本（2017）が先行研究で報告し、日名子（2007）は女児の描画の特徴として服装の模様の描き分けや彩色の器用さについて、仁科と杉本（2007）は女児の概念色の理解が男児よりも早いことについて報告している。したがって、女児は男児よりも描画の際の色彩のぬり分けや彩色の工夫がみられること、色彩への関心の高さがうかがえることから、男児よりも女児の方が使用色数が多くなることが考えられる。

次に自由画の使用色と幼児の好きな色について考察する。自由画では4歳男児は「赤」の使用割合がもっとも高い。4、5歳女児の「ピンク」の使用が多いのは、「ピンク」をかわいいと思っていること（清澤，2014）が影響していると推測される。

色の好みの性差について、養育環境による影響を指摘している報告がある。色彩嗜好調査を行った Sorokowski P., Sorokowska A. & Witzel C. (2014) は、環境や文化的背景に関わらず、色の好みには性差があると報告している。また、弁当箱の色を用いた色彩調査（香曾我部・安孫子・渡部，2017）では女児・女性はピンク色を好み、男児・男性は青と黒を好むことを明らかにしている。持ち物や身に着けるものの色が、男児の多くは青、女児の多くはピンクであり、早い時期から色の環境が異なることを指摘した（Pomerleau A., Bolduc D., Malcuit G., & Cossette L., 1990）、一方、生物学的なものや文化的背景や個人による経験の影響と、両者が要因と推測（Hurlbert A.C & Ling Y., 2007）もされている。

自由画のモチーフの調査結果で特徴的なモチーフは、男児が女児よりも「不明」が多いのは、描画発達が女児の方が早い（郷間・川越・立田・中市・郷間・鈴木・落合，2013）ことが影響していることが考えられる。また、5歳男児の「乗り物」、女児の「ひと」のモチーフの多さについては性差が認められた。新生児を対象にした知覚の調査では、男児は「車」を、女児は「ひとの顔」を見る時間が長いという報告（Connellana, Cohena, Wheelwrighta, Batkia & Ahluwalia, 2000）があることから、新生児期から興味や関心のあるものには性差があり、それが幼児期の自由画や造形活動にも表れていることが推測される。

自由画の構図の調査結果では、構図における「表現の特徴」では、4、5歳とも女児

は男児よりも「横並び型並列表現」が多く、皆本（1981）や新井（2001）の調査においても女児の自由画の構図の特徴として、並列的にモチーフを描くことを挙げていることを裏付ける結果となった。男児の特徴である「俯瞰表現」（皆本，1981）は確認できず、男児の「描いた位置」については5歳では男児は女児よりも「バランスの取れた」構図が多いことが確認されたことから、女児は男児よりも画用紙の形を考えて描き、「バランスの取れた」構図で描いていることが考えられる。

幼児の造形教育の専門家による自由画の評定を行い性差の特徴を検討した結果、「描写力」「着想」「主題」「色彩」「技法」の評定において、女児が男児よりも評定が高いことが認められた。女児は男児よりも描きたいものが明確なことや、描画発達も女児は男児よりも早いことから、描きたいもの、事柄にふさわしい表現方法や技術を用いて描いていることが考えられる。男児は7つの項目のうち「自由」の評価が最も高いことから、描きたいことを「自由」に表現していることが考えられる。小学校以降に技術面が備わると、「描写力」や「色彩」「技法」などを駆使して自分なりの自由画を表現するようになることが予想される。

また、この評定は小学校の教員が描画指導をしていく上で設定している項目をもとに作成していることから、女児は男児よりも保育者の意図や指示に沿った描画表現をしたり、保育者の指導の影響を受け入れたりすることで、保育者の期待に応じた描画表現となり、専門家による評定が高くなったことも推測される。

家庭での描画の際には、保護者の言葉がけには男児には「大きく」「かっこよく」、女児には「かわいらしく」という回答がみられたが、回答数が少ないことから参考に留めたい。教育方針と幼児の性別には関わりがほとんどみられなかったが、質問項目数が少なく結論づけることはできない。

これまで、幼児の造形発達では年齢を中心に考えられ、性別による表現の特徴には着目した調査研究は少ない。本研究により、自由画の色彩、モチーフ、構図には性差があること、描画指導の観点による自由画の評定について性差が認められたことから、幼児の造形表現には性別により特徴が異なることが明らかとなった。

第3節 研究の限界と今後の課題

1. 研究の限界

本研究の結果から、幼児の造形表現にみられる性差の特徴について明らかにすることができた。本節では、研究において指摘されるべき問題点について述べる。

幼児の自由画の色彩について、photoshop を用いて各色彩の使用量を把握することを試みた。このとき色が重なっている点や線、面のピクセル数に置きかえて拾うことができても重なっている色を1色ずつ分けて拾うことは困難であった。また、少ないケースではあるが、画用紙の余白について幼児自身が白いクレヨンでぬっていない場合でも、白色、白い部分と考えて使っている場合も推測され、白の使用量について結論づけるには慎重になる必要がある。

また、自由に絵を描くとき、幼児自身が好きな色を積極的に選ぶことは想定できるが、好きな色となる要因については明らかにすることが困難であった。調査対象となる自由画の数を増やして使用される色彩について検討することや、工作、折り紙などのさまざまな造形表現に使われる色彩についても調査分析を行うことで、さらに研究を深めたい。

自由画のモチーフについては、カテゴリ分類によって性差の特徴を把握することができた一方、「不明」が多い結果となった。幼児の描いたモチーフが伝わりにくいことも考え、自由画収集時に何を描いたのかを幼児に聞き取りをするなどの配慮があれば、より詳細な分析が可能だったことが推測される。

自由に絵を描くとき、幼児自身が好きな色だから使うのか、描きたいモチーフの色が選択されているのか、好きな色が使われているものを描きたいから結果的に好きな色が使用されているのか、把握するには至らなかった。作品を対象とするだけでなく、幼児が表現する過程や、表現した後の聞き取りなども含めた調査分析を行うことで、色彩選択の理由や、表現したいモチーフへのこだわりや思いにも焦点をあてる方法を検討する必要がある。

自由画の構図のカテゴリ分離では、先行研究に倣って構図を各カテゴリに該当するかどうかで分析を行ったが、分類の過程では多様な組み合わせの構図による自由画が少なからずみられた。したがって、本研究の調査結果だけで、構図にみられる性差の特徴を結論づけることには慎重になる必要がある。

次に自由画について幼児の造形教育の専門家による7つの評定を行うことで、自由画にみられる性差の特徴を見出そうとした。評定項目は先行研究をもとに描画指導の観点や描画の構成要素に沿った内容であり、その結果、評定項目について性差を確認することができた。多くの幼児の造形表現をみてきた専門家に、これらの評定項目に加え「男の子らしさ」「女の子らしさ」についての評定を求めることで、より明確な自由画の性差の特徴を明らかにすることができた可能性が考えられる。しかし本研究の調査では、幼

児教育の専門家に幼児の性別の特徴に関する質問項目が設定されていないことから、自由画の表現にみられる性差の特徴を結論づけるにはさらなる検討が必要である。

家庭での描画について保護者に質問紙調査を行ったが、さらに描画の際の関わりや教育方針について質問数を増やし、自由記述で回答を求めることで、各家庭における幼児の性差への配慮についても検討する必要がある。また、家庭での自由画を収集し、園での自由画と比較検討することで、家庭教育の影響を把握することも期待できる。

本研究では、幼児の造形表現の性差の特徴を明らかにするために、幼児の作品の色彩、モチーフ、構図を分析することと幼児の造形教育の専門家による自由画の評定、そして家庭における幼児の描画遊びや幼児の性別による保護者の関わりや教育方針について調査分析を行った。この研究により、幼児の自由画の表現に関する性差の特徴について一定の成果を得ることができた。しかし、幼児の造形表現にみられる性差の特徴により迫るためには、本調査に加え、自由画の色彩には画用紙の余白の解釈、描かれたモチーフの幼児への聞き取り、複合的な構図の分析については検討する必要がある。さらに、幼児の造形教育の専門家に性別による造形表現の特徴を尋ねる直接的な視点を設定することで、より詳細に造形表現の性差の特徴を見出すことができる。また、幼児が家庭で描いた描画について分析し、保護者の描き方の教え方や言葉がけの影響についても分析することで、性差の特徴の要因についても検討していく必要がある。

2. 今後の課題

前述の研究の限界をふまえ、幼児の造形表現にみられる性差の特徴に関する研究を継続すべきであると考えられる。

以下の事柄について検討し、今後の調査研究に活かしたい。幼児の自由画収集の際に、何を描いたのか、また余白の持つ意味などについて聞き取り調査を行うこと、幼児の自由画に混色や重色があったとき、何色によって重色や混色がされているのか、目視とphotoshopで確認すること、モチーフや構図のカテゴリ分類を複数の人間によって行うことで客観性を高める必要がある。作品の評定や質問紙調査に、幼児の造形表現の「男の子らしさ」「女の子らしさ」を尋ねる項目を加えることで自由画の性差の特徴を明らかにすることが期待できる。また、造形表現には数値化することの難しさがあることから、自由記述による評価を求めることを検討する必要がある。家庭での描画遊びについては、描画以外の幼児の家庭での好きな遊びや玩具などについても調査を行ったり、教育方針について自由記述を求めたりすることで、家庭環境や保護者の考えが、幼児の自由画の表現にどのように影響しているのかさらに検討する必要がある。

これまで幼児の造形活動や造形表現について、年齢による発達を中心に考えられてきたが、本研究によって性差について考える必要性が確認された。幼児の造形表現にみら

れる性差の特徴について把握することで、幼稚園や保育所等での造形活動や保育環境等に活用することが可能となる。特に集団での学びの場である園における描画活動では、幼児の表現したい思いや活動に任せるだけではなく、性別による描画表現の偏りを補うことを保育者は考える必要がある。例えば教材の提示では、女兒にも青や寒色系を使いたくなるテーマを設定したり、男児にも多くの色を使うことで描画表現が楽しくなるような画材や表現技法を提案したりするなど、保育者の指導や保育環境の工夫が求められる。

今後も幼児の性差を中心とした造形表現について探求し、保育者の描画指導や造形活動につながるよう、そして幼児がより自由に造形表現を楽しむことができるよう、研究に取り組んでいきたい。

引用文献

- 阿部宏行 (2014) 子どもの絵における空間表現の発達と指導(1)「食事の風景」の絵を通して, 美術科教育学, 35, 15-26.
- Alschuler R.H, & Hattwick L.B.W. (1969) (アルシュラーR.H, ハトウィック L.B.W. 島崎清海(訳) (2002) 子どもの絵と性格, 文化書房博文社)
- Alter-Muri, & Vazzano (2014) Gender and Age Differences in Children's Perceptions of Self-Companion Animal Interactions Expressed through Drawings, *Journal of Human-Animal Studies*, 25 (2), 77-97.
- Andrée P., Daniel B., Gérard M., & Louise C. (1990) Pink or Blue Environmental Gender Stereotypes in the First Two Years of Life, *Sex Roles*, 22 (5), 359-367.
- Anya C. H., & Yazhu L. (2007) Biological components of sex differences in color preference, *Current Biology*, 17 (16), 623-625.
- 青野篤子(2008)園の隠れたカリキュラムと保育者の意識, 福山大学人間文化学部紀要, 8, 19-34.
- 青野篤子・金子省子 (2008) 保育にかかわる保護者のジェンダー観, 日本家政学会誌, 59(3), 135-142.
- 新井康允 (2001) 幼児の自由画の男女差とアンドロゲン, 人間総合科学, 1, 105-115.
- 有阪治 (2000) 脳の性分化と性ホルモン, 日本小児科学会雑誌, 104, 1073-1076.
- Berenbaum S.A, & Beltz A.M. (2011) Sexual differentiation of human behavior Effects of prenatal and pubertal organizational hormones. *Front Neuroendocrinol*, 32, 183-200.
- Connellan J., B.Cohen S., Wheelwright S., Batki A., & Aulwalia J. (2000) Sex differences in human neonatal social perception, *Infant Behavior & Development*, 23, 113-118.
- Deaver Sarah P. (2011) A Normative Study of Children's Drawings: Preliminary Research Findings, *Journal of the American Art Therapy Association*, 26(1), 4-11.
- 堂地勉・久具宏司・高木耕一郎 (2013) クリニカルカンファレンス 6 (ヘルスケア) 思春期疾患とその対策 1) 原発性無月経の治療とカウンセリング, 日産婦誌, 65 (9) 156-165.
- Flannery K.A., & Watson.M. (2015) Sex Differences and Gender-Role Differences in Children's Drawings, *Studies in Art Education*, 22, 114-122.
- Fleming JW., Holmes S., Barton L., & Osbahr B. (1993) Differences in color

- preferences of well school-age children and those in varying stages of illness, *Matern Child Nurs J*, 21(4), 130-42.
- Gerianne M., & Melissa H. (2002) Sex differences in response to children's toys in nonhuman primates (*Cercopithecus aethiops sabaeus*), *Evolution and Human Behavior*, 23 (6), 467-479.
- 郷間英世・川越奈津子・立田瑞穂・中市悠・郷間安美子・鈴木万喜子・落合利佳 (2013) 最近の子どもの描画発達の男女差についての検討, 京都教育大学紀要, 122, 101-109.
- 服部未由妃・堀内貴充・勝野克彦・板垣博己・加藤 一誠・井上由衣・前田めぐみ・花園誠・赤尾壽允 (2007) 子どもはなぜウサギをピンクに彩色するのか, 動物観研究 : ヒトと動物の関係学会誌, 12, 23-28.
- 日名子孝三 (2009) 幼児・児童の描画表現における模倣と指導の関係 技術的・写実的観点から, 文京学院大学人間学部研究紀要, 11(1), 305-315.
- Hines M. (1992) Prenatal gonadal hormones and sex differences in human behavior, *Psychol Bull.*, 92, 56-80.
- 堀川玲子 (2012) 性腺性分化疾患の臨床的アプローチ, 日本内科学会雑誌, 101 (4), 965-974.
- Hoshino N. (2016) The two-layer model of 'kawaii' A behavioural science framework for understanding kawaii and cuteness, *East Asian Journal of Popular Culture*, 2(1), 79-95.
- 藤岡久美子・片山敬子・阿部高典・那須さおり・木村重子 (2012) 幼稚園における動物飼育経験と動物に対する認識の関連 カメ, チョウ, ダンゴムシの知識と擬人化, 山形大学教職・教育実践研究, 7, 33-43.
- 藤田文 (2005) 幼児の自己主張性と遊びの嗜好との関連, 大分県立芸術文化短期大学紀要, 43, 141-150.
- 深見真紀・曾根田瞬・矢澤隆志・宮本薫・緒方勤 (2012) チトクローム P450 オキシドレダクターゼ (POR) 異常症の分子基盤: POR 遺伝子発現制御機構, 日本生殖内分泌学会雑誌, 17, 17-20.
- 福田百邦・公平昭男・桜本敏夫・大島博幸・山田清美 (1985) 46, XX 真性半陰陽の 1 例 本邦例 37 例の集計と治療における若干の考察 泌尿器科紀要, 31(5), 857-861.
- 福岡市教育センター (2013) 自分のイメージを思い通りに表現できる児童を育む図画工作科学習指導の在り方ー絵に表す活動における「イメージファイル」の活用を通してー, 平成 25 年度研究紀要, 924, 1-34.
- Hurlbert A.C., & Ling Y., (2007) Biological components of sex differences in color preference, *Current Biology*, 17(16), 623-625.

- Iijima M., Arisaka O., Minamoto F, & Arai Y. (2001) Sex Differences in Children's Free Drawings -A Study on Girls with Congenital Adrenal, *Hyperplasia Hormones and Behavior*, 40(2), 99-104.
- Isaacs, L. D (1980) Effects of ball size, ball color, and preferred color on catching by young children, *Perceptual and Motor Skills*, 51, 583-586.
- 石川秀也 (2006) 子どもの絵 よさをよみとる 100 事例, ジアース教育新社, 20-21.
- 石見和世・菅田純子・位田忍 (2018) 1 施設における先天性副腎過形成女児への病気説明の実態調査, *小児保健研究*, 77(4), 347-354.
- 糸井嘉 (2019) 幼児の絵画表現についての一考察 人形劇「なかよし」を題材として, *保育研究*, 49, 29-40.
- 岩見健二 (2017) 子どもの絵をどう見るか, *兵庫大学短期大学部研究集録*, 52, 1-8.
- Jennifer C., Simon B.C., Sally W., Anna B., & Jag A (2000) Sex differences in human neonatal social perception, *Infant Behavior and Development*, 23(1), 113-118.
- 金子省子・青野篤子 (2008) ジェンダーの視点で捉えた保育環境と保育者のジェンダー観, *日本家政学会*, 59(6), 363-372.
- 古賀隆一 (2011) 子どもの絵画教育研究－幼児絵画の指導実践の視点と課題－, 1, 31-41.
- 古賀隆一 (2014) 絵画教育研究 (その 3) －幼児・児童画の心と基礎デッサン入門南九州大学人間発達研究, 4, 55-67.
- 古賀隆一・初田隆・寺元幸仁 (2015) 児童画コンクール入選作品への子どもの評価枠組に関する研究－子どもと教師の比較調査をもとに－*美術教育学*, 36, 445-449.
- 香曾我部琢・郷家史芸 (2019) 鬼ごっこ遊びにおける幼児の行為の性差, *宮城教育大学紀要*, 53, 217-222.
- 香曾我部琢・安孫子遥・渡部聡美 (2017) 幼児の弁当箱の色彩に関する印象評価尺度の作成 性別と色の嗜好性に着目して, *宮城教育大学情報処理センター研究紀要*, 24, 39-44.
- Kellogg, R. (1969) *Analyzing Children's Art*, Calif, National Press Books. (ケログ, R. 深田尚彦 (訳) (1998), *児童画の発達過程 ながり描きからピクチャアへ* 黎明書房)
- Kin W. M. S., Mei S. L Y & Lin W. (2015) Gender Differences in Children's Use of Colors in Designing Safety Signs, *Procedia Manufacturing*, 3, 4650-4657.
- 清澤雄 (2014) かわいい色の調査結果に基づく評価者のクラスター分類とその嗜好特性, *日本感性工学会論文誌*, 13(1), 107-116.
- 小池美知子 (2015) 5 歳児クラスの声と動きの活動に見られた表現の様相 オノマトペの

- 絵本を題材に，松山東雲女子大学人文科学部紀要，23，15-24.
- 栗山誠（2010）幼児の“描きながらイメージを広げる”描画の研究 描画手順と意味の変化，大阪総合保育大学紀要，5，105-114.
- Lowenfeld, V. (1947) *Creative and mental growth*, London Penguin Books, (ローウェンフェルド, V. 竹内清 (訳) (1995), 美術による人間形成 創造的発達と精神的成長, 黎明書房)
- Milne L., & Greenway P. (1999) Color in children's drawings The influence of age and gender., *The Arts in Psychotherapy*, 26(4), 261-261.
- 皆本二三江（1979）幼児の嗜好色を中心とした造形表現の性差に関する文献比較，武蔵野女子大学短期大学部幼児教育研究集録，1，89-97.
- 皆本二三江・新井良子（1979）幼児の色彩表現における造形教育論的考察 造形表現の性差に関する研究，武蔵野女子大学紀要，14，183-199.
- 皆本二三江（1980）幼児の造形表現におけるモチーフの性差に関する造形教育論的考察，武蔵野女子大学紀要，15，89-97.
- 皆本二三江（1981）造形教育論的視点における並列表現型構図の性差分析，武蔵野女子大学紀要，16，109-119.
- 皆本二三江（1984）小学校児童の色彩表現における性差傾向について，武蔵野女子大学紀要，19，113-126.
- 皆本二三江（1985）幼児の色彩表現における造形教育論的考察，武蔵野女子大学紀要，14，183-199.
- 皆本二三江（1986）絵が語る男女の性差 幼児画から源氏物語絵巻まで，東書選書，47-120.
- 皆本二三江（1993）1，2歳児の描画にあらわれる使用色の性差傾向について，武蔵野女子大学短期大学部幼児教育研究集録，15，4-7.
- 皆本二三江（2017）「お絵かき」の想像力 子どもの心と豊かな世界，春秋社
- 三浦由梨・渡邊加礼・渡邊タミ子・大山建司（2005）幼児期女児の描いた人物画によるボディイメージ発達の研究．山梨大学看護学会誌，3（2），13-20.
- 武藤久枝・加藤孝正（2017）保育所年中児の動的学校画における特徴，中部大学現代教育学部紀要，9，13-21.
- 中尾美千子（2008）幼児の表現を育てる保育者の役割 絵画表現を通しての一考察，関西女子短期大学紀要，17，33-48.
- 仁科伍浩・杉本真理子（2007）児童期における色の持つ意味の共有化過程について--色・単語マッチング法を応用しての検討，帝京大学文学部教育学科紀要（32），27-35.
- 大橋康宏（2007）幼児における色彩と図形の嗜好の検討，山陽学園短期大学紀要，38(0)，21-28.

- 大木紫 (2018) 生物学的に見た男女差 脳と行動への影響, 杏林医会誌, 49(1), 21-25.
- 尾久裕紀 (2014) 親子のメンタルヘルス, 関西大学経済・政治研究所セミナー年, 25, 101-109.
- 尾崎康子・古賀良彦・金子マサ・竹井 史(2010) ぬりえの不思議 心と体の発達に見るその力, ぎょうせい.
- Picardab D., & Boulhaisa M. (2011) Sex differences in expressive drawing, *Personality and Individual Differences*, 51(7), 850-855.
- Piotr S., Agnieszka S., & Christoph (2014) Witzel corresponding author, *Psychon*, 21(5), 1195-1201.
- Pomerleau A., Bolduc D., Malcuit G., & Cossette L. (1990) Pink or Blue Environmental Gender Stereotypes in the First Two Years of Life, *Sex Roles*, 22(5) 359-367.
- 斉藤克幸 (2005) 美術作品における評価の客観性について, 比治山短期大学部紀要, 40, 73-89.
- 坂本渉 (2013) 幼児の「ままごと遊び」における環境構成についての一考察, プール学院大学研究紀要, 54, 261-274.
- 笹原恵 (2009) 幼児期におけるジェンダー社会化に関する一考察 静岡県における高校生調査の分析より, 静岡大学情報学研究, 14, 33-59.
- 青陽結・高橋敏之 (2015) 幼児の描画活動におけるキャラクター表現に対する保育者の評価, 美術教育学, 36, 239-251.
- 瀬尾知子・戸次佳子・沢井佳子 (2017) 2, 3歳児の折り紙を用いた形構成の過程 乳幼児の創造性を育む教具の提案, 秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学部門, 72, 51-55.
- 島田由紀子 (2001) 幼児の色彩感情, 美術教育学, 22, 95-104.
- 島田由紀子 (2002) 幼児の色彩感情 (2) チェコと日本の幼児の比較を中心に, 美術教育学, 23, 97-107.
- 島田由紀子・堀川玲子・有阪治 (2010) 胎生期性ホルモンの空間認知能への影響を粘土の造形表現からみた検討, ホルモンと臨床, 58, 1107-1110.
- 島田由紀子 (2011) 図形からの見立ての描画発達と性差, 美術教育学, 32, 173-184.
- 島田由紀子・市川剛・志村直人・小山さとみ・堀川玲子・有阪治 (2008) 胎生期性ホルモンの空間認知能への影響を粘土の造形表現からみた検討 (第1報), 第42回日本小児内分泌学会抄録集, 154.
- 島田由紀子・市川剛・志村直人・小山さとみ・堀川玲子・有阪治 (2009), 胎生期性ホルモンの空間認知能への影響を粘土の造形表現からみた検討 (第2報), 第43回日本小児内分泌学会抄録集, 151.

- 清水隆子 (2003) 幼児の色彩選好と親のジェンダー意識 ピンク色選好にみられるジェンダー・スキーマー, 早稲田大学大学院教育学研究紀要, 11, 87-95.
- 進野智子・小川理恵・加藤千恵・川端紀子・松尾登喜子・松島綾・松永康代 (1993) 幼児の遊びに関する発達心理学的研究 幼児のひとり遊びに関する研究 I, 長崎大学教育学部教育科学研究報告, 45, 231-242.
- Simone A.M & Stephanie V. (2014) Gender typicality in children's art development A cross-cultural study, *The Arts in Psychotherapy*, 41, (2), 155-162.
- Sorokowski P, Sorokowska A, & Witzel C. (2014) Sex differences in color preferences transcend extreme differences in culture and ecology, *Psychon Bull Rev*, 5, 1195-1201.
- Siu. Kin Wai. M, Lam, Mei Seung, & Wong. Yi Lin. (2015) Gender Differences in Children's Use of Colors in Designing Safety Signs. *Procedia Manufacturing*, 3, 4650-4657
- 杉浦篤子 (2009) 子どもと造形 表現を育てるために, 藤女子大学紀要, 46 (2), 101-112.
- 武田京子・笹原裕子・松葉口玲子 (2005) 幼児のジェンダーアイデンティティ形成過程とその要因, 保育学研究, 43(2), 256-268.
- Thomas, G. V., & Silk, A. M. (1990) An introduction to the psychology of children's drawing, New York Harvester Wheastheaf, (トーマス, G.V., & シルク, A. M. 中川作一 (監訳) (2011), 子どもの描画心理学, 法政大学出版会)
- Turgeon. M.S (2008) Sex differences in children's free drawings and their relationship to 2D:4D ratio, *Personality and Individual Differences*, 45, 527-532.
- 植草一世 (2016) 大学附属幼稚園における保育の質を高めるための取り組み 子どもの遊びを活性化させるための素材活用 植草学園大学研究紀要, 8, 39-50.
- 梅本恵 (2015) 保育者がとらえる子どもの性差とかかわり方 幼稚園教諭への質問紙調査の結果から, 富山短期大学紀要, 50, 1-12.
- Wright Lynn & Black Fiona (2013) Monochrome Males and Colorful Females: Do Gender and Age Influence the Color and Content of Drawings?, *SAGE OPEN*, 3, 1-9.
- 山田洋揮 (2008) 中学校現場での美術科テストの活用と現状 : 日米のテスト法の比較を通して, 美術科教育学会誌, 29, 605-616,
- 山田真世 (2018) 幼児期の描画における模倣の生起と表現変化, 福山市立大学教育学部研究紀要, 6, 115-121.
- 山尾沙耶香・田中吉資 (2004) 幼稚園 5 歳児及び小学 1 年生の動的家族画: 発達と家族への思い, 香川大学教育実践総合研究, 9, 101-114.

矢島毅昌（2017）保育者の援助がつなぐ男／女の遊び集団間の人間関係 保育者の構成
する人・物・環境の関係に着目して，人間と文化，1，159 -166.

参考文献

- 阿部宏行 (2018) 子どもの造形表現の発達と指導のあり方 幼児や小学生の表現方法の獲得, 美術教育学, 39, 1-13.
- 浅海真弓・初田隆・磯村知賢 (2018) 粘土造形と描画の発達段階の共通性等についての研究 II 立体と描画の人物表現 モデルの有無等を手掛かりに, 美術教育学研究, 50, 33-40.
- Auster C. J. (2016) Contemporary Mother's Day and Father's Day Greeting Cards: A Reflection of Traditional Ideologies of Motherhood and Fatherhood?, *Journal of Family Issues*, 37(9), 1294-1326.
- Bridges J. S. (1993) Pink Or Blue: Gender-Stereotypic Perceptions of Infants as Conveyed by Birth Congratulations Cards, *Psychology of Women Quarterly*, 17(2), 133-255.
- 千々岩英彰 (1983) 色彩学, 福村出版
- Glaser J. (2007) The Need for Recognition: P4C as a Response to Simister's "Bright Girls Who Fail", *Gifted Education International*, 22 (2-3), 218-228.
- 花田道子・山田志麻 (2011) 幼児の遊びや生活体験と性差の関係九州共立大学スポーツ学部研究紀要, 5, 61-64.
- 平井誠也・竹中郁子 (1995) 幼児・児童における円筒形の描画過程の発達の研究, 発達心理学研究, 6, 144-154.
- Houtte. M V (2004) Why boys achieve less at school than girls: the difference between boys' and girls' academic culture, *Educational Studies*, 30(2), 159-173.
- 池田吏志・新井馨・遠地千智・掛志穂 (2019) 幼稚園における遊びを取り入れた「表現」に関する実践的研究 小学校図画工作科「造形遊び」との共通性を踏まえて, 学校教育実践学研究, 25, 31-38.
- 伊藤智里・高橋敏之 (2012) 一幼児の積み木遊びに見る生活体験を通じた立体表現の多様性, 美術教育学, 33, 93-105.
- 伊藤裕子 (2000) ジェンダーの発達心理学, ミネルヴァ書房
- 香月欣浩 (2018) 幼少期のものをつくることや絵を描くことに対する他者からの評価が, その後の造形表現の「好き」「嫌い」に与える影響 保育士養成課程の学生への調査結果を保育実践に役立たせるために, 美術教育学 50, 145-152.
- 木村涼子・小玉涼子 (2005) 教育/家族をジェンダーで語れば, 白澤社
- 北原靖子 (1996) パターン構成に見る造形心理(2) 美術作品の多様性はいかにして保

- たれるか, 金沢美術工芸大学紀要, 40, 25-32.
- 近藤綾・渡辺大介・中見仁美 (2016) 幼児の描画表現に関する発達的研究 想像画と観察画の比較, 幼年教育研究年報, 38, 85-93.
- 栗山誠 (2017) 子どもの造形表現過程における夢中になる体験, 教育学論究, 9(2), 99-106.
- 前嶋英輝 (2019) 粘土遊びの情報と評価法, 吉備国際大学研究紀要, 29, 61-72.
- 村田透 (2018) 子どもの造形表現活動における課題探究について : 小学生を対象とした「造形遊び」の題材より, 美術科教育学会誌, 39, 329-346.
- 中野隆二 (2010) 子どもの発達支援における美術教育分野からの提案 事例通して, 中村学園大学発達支援センター研究紀要, 1, 21-28.
- 中谷洋平・藤本浩一 (1993) 美と造形の心理学, 北大路書房
- 奥美佐子 (2010) 自由画における子ども間の模倣 1 自由画とは何か, 神戸松蔭女子学院大学学術研究会, 研究紀要 人文科学・自然科学篇 51, 29-46.
- 大場有希子 (2019) 臨床心理学における子どもの描画に関して 相互交流としてのスキュグルを中心に, 京都大学大学院教育学研究科紀要, 65, 123-135.
- 近江源太郎 (1984) 造形心理学, 福村出版
- Sax., L. (2005) Why Gender Matters: What Parents and Teachers Need to Know about the Emerging Science of Sex Differences (2005) (谷川漣(訳) (2006) 男の子の脳、女の子の脳 こんなにちがう見え方、聞こえ方、学び方, 草思社)
- 島田佳枝 (2012) 子どもの主体としての育ちを支える〈共感的なかかわり〉についての一考察 幼児と親の粘土遊びを事例として, 美術教育学, 33, 215-229.
- 高崎葉子・山本早里 (2016) 美的評価の共有によるデザインの基礎教育の可能性について デザイン系大学生への調査結果から, デザイン学研究, 63, 236-237.
- 渡辺敏 (2018) 幼児が立方体を構成する方略に関する研究 遊びの環境が幼児に与える影響に焦点を当てて, 実践女子大学生活科学部紀要, 55, 27 -33.
- 山形恭子 (1999). 発達初期における表象的描画の成立過程, 臨床描画研究, 12, 6-19.

資料

お子様のお絵かき活動などに関するアンケート調査のお願い

この調査は、お子様のご家庭での遊びの様子が絵の表現にどのように影響するのかについて把握するし、より良い絵の指導を考えるためのものです。

回答にかかる時間はおよそ 15 分です。回答に正しいや誤りはありませんので、思いつくままにご回答下さい。なお、この調査結果は質問ごとに集計されるので個人が特定されることはありません。また、同時期に園(所)で描いていただいたお子様の絵についてのアドバイスをご回答していただいた保護者の皆様に、個別にお渡しするため、園名、クラス名、お名前の記入をお願いしています。

このアンケートの「お子様」とは、このアンケート用紙をお渡しした園(所)の先生のクラスに通うお子様のことをさします。以下では、このアンケート用紙の対象となっているお子様についてのみお答えください。

ご協力お願いいたします。 調査責任者 和洋女子大学 島田由紀子 y-shimada@wayo.ac.jp

●以下、お子様についてお尋ねします。

1. 通われている園(所)名： _____ 2. クラス名： _____ 組

3. お名前： _____ 4. 生年月日： _____ 年 _____ 月 _____ 日

5. 年齢： _____ 歳 6. 性別： 男児 女児

7. お子様とあなたの続柄： 父親 母親 祖父 祖母 その他(具体的に： _____)

8. お子様と一緒に住んでいる方すべてに○をつけてください(お子様からみた続柄で回答してください。)

父親 母親 祖父 祖母 兄 姉 弟 妹 その他の親族 親族以外

9. お子様のきょうだい数：お子さんからみた場合のきょうだいの人数を()内に記入し、年齢を()にご記入ください。

兄()人 → 年齢()歳 ()歳 ()歳

姉()人 → 年齢()歳 ()歳 ()歳

弟()人 → 年齢()歳 ()歳 ()歳

妹()人 → 年齢()歳 ()歳 ()歳

10. お子様はお絵かきや工作などの習い事をしていますか。 はい いいえ

11. お子様はお絵かきや工作などの習い事を過去にしていましたか。 はい いいえ

12. お子様の好きな色を、好きな順にいくつでも書いてください。

13. お母様の好きな色を、好きな順にいくつでも書いてください。

14. お母様の好きな色をお子様は知っていますか。 はい いいえ

●お子様のご家庭でのお絵かきの様子についてお尋ねします。

15. お子様は、何を使って絵を描いていますか？ あてはまるものすべてに○をつけてください。

- 鉛筆 色鉛筆 クレヨン サインペンやマジック
 iPad やパソコン その他（具体的に： _____）

16. お子様は何に絵を描いていますか？ あてはまる番号すべてに○をつけてください。

- 画用紙 スケッチブックやお絵かき帳 広告などの裏紙 コピー用紙
 iPad やパソコン その他（具体的に： _____）

17. お子様のご家庭で描く絵には、どのようなものが多いですか。お花、電車、妖怪ウォッチ、プリキュア、またはどのような場面（公園で遊んでいるところ、など）なのか、具体的にお答えください。

18. お子様は、ご家庭でどのくらいの頻度でお絵かきをしていますか。

- 毎日 週2、3回 週1回 ほとんど描かない

19. お子様は誰とお絵かきをすることが多いですか。あてはまる()すべてに○をつけ、もっとも多い()に◎をつけてください。

- 父親 母親 兄 姉 弟 妹
 祖父 祖母 同性の友達 異性の友達 ひとり
 その他（具体的に： _____）

16. お子様は、お母様とどのくらいの頻度でお絵かきをしていますか。

- 毎日 週2、3回 週1回 ほとんど描かない

●保護者の方にお尋ねします。

17. お子様には、どのようにお絵かきを教えていますか。

あてはまる()すべてに○をつけてください。

- 手本を描いてみせる 手をとって描き方を教える
 言葉だけで描き方を教える 描く順番を教える
 色のぬり方を教える 色をぬる順番を教える
 ものの大きさを描けるよう教える 描くものを実際に見せる
 描くものの写真や図鑑などを見せる 鉛筆やクレヨン、サインペンなどの持ち方を教える
 ぼかし方や重ねぬりなどの技法を教える 描き方のDVDなどの映像を見せる
 その他（具体的に： _____）

18. お子様が絵を描いているとき、どのような言葉をかけていますか。

あてはまる（ ）すべてに○をつけてください。

- | | | | |
|---------------------------------------|--------------|--------------------|-------------|
| () 落ちついて | () 上手に | () ていねいに | () 元気よく |
| () カッコよく | () はみ出ないように | () バランスよく | () かわいらしく |
| () 大きく | () 細かく | () バック・背景も色をぬるように | |
| () 色を考えて | () 大きさを考えて | () 形を考えて | () 思いきって |
| () 好きなように | () よく見て | () 汚さないで | () 静かに |
| () よく考えて | () 集中して | () きれいに | () 姿勢をよくして |
| () どこを〇〇色にぬるよう話す→(具体的に: _____) | | | |
| () 〇〇を描くよう話す(具体的なものを言う)→(具体的に _____) | | | |
| () その他(具体的に: _____) | | | |

19. お子様が絵を見せたときどのような言葉をかけていますか。

あてはまる（ ）すべてに○をつけてください。

- | | | |
|-----------------|----------------------|----------------|
| () 落ちついて描けたね | () 上手に描けたね | () ていねいに描けたね |
| () 元気よく描けたね | () カッコよく描けたね | () はみ出ないで描けたね |
| () バランスよく描けたね | () かわいらしく描けたね | () 大きく描けたね |
| () 細かく描けたね | () バック・背景も色をぬれたね | () 色を考えて描けたね |
| () 大きさを考えて描けたね | () 形を考えて描けたね | () 思いきって描けたね |
| () 好きなように描けたね | () よく見て描けたね | () 汚さないで描けたね |
| () 静かに描けたね | () よく考えて描けたね | () 集中して描けたね |
| () きれいに描けたね | () 姿勢をよくして描けたね | () きちんと片づけようね |
| () 手を洗ってきなさい | () その他(具体的に: _____) | |

20. お子様がお絵かきすることで、どのようなことを期待していますか？

あてはまる（ ）すべてに○を、もっとも期待することに◎をつけてください。

- | | |
|--------------------------|------------------------|
| () 本物そっくりに描けるようになること | () 想像力が豊かになること |
| () 色彩センスを身につけること | () 道具やものを大切に扱うようになること |
| () 掃除やお片付けが上手になること | () 個性が発揮されること |
| () 手先が器用になること | () 文字が上手に書けるようになること |
| () 静かに過ごすこと | () 集中力が身につくこと |
| () 男の子らしさ女の子らしさを表現できること | |
| () その他(具体的に: _____) | |

●子育てや保育・幼児教育の方針についてお尋ねします。

27. 子育てや保育・幼児教育の方針として、次のような考え方についてどう思いますか？

非常にそう思う～全くそう思わない、の5段階でもっともあてはまる番号に○をつけてください。

	非常に そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまり そう思わない	全く そう思わない
1. 男女を同じように扱って、男女の違いや差が生じないようにすべきである。	5	4	3	2	1
2. できるだけ男女は同じように扱うのがよいが、男女の身体的な違いには配慮すべきである。	5	4	3	2	1
3. 女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく育つように配慮すべきである。	5	4	3	2	1
4. 子どもの自主性や子どもの個性を最優先すべきである。	5	4	3	2	1

ご協力ありがとうございました。 記入後、担任の先生にお渡してください。(締切： 月 日)

謝辞

博士論文を提出するにあたり、多くの方々のご指導とご助力をいただきました。

徳田克己先生には、入学時から今日に至るまで長い間、ご指導いただいたこと、厚く御礼申し上げます。

水野智美先生には、多くの励ましの言葉とともに丁寧なご指導をいただき感謝申し上げます。森田展彰先生からは、調査内容に応じた分析方法や言葉の選び方など有益なご指導をいただきました。大沢力先生には、現在の幼児教育、保育における造形指導の在り方や今後の研究の方向性について改めて考える機会を与えていただきました。

先生方からいただいたご指導やご助言は、私にとって何ものにも代えがたい貴重な学びとなりました。ここに深く謝意を表したいと思います。

また、研究室の先輩や後輩の方々をはじめ、大越美和さんには調査の準備から論文をまとめる過程でも大変お世話になりました。ありがとうございました。調査にご協力してくださった幼稚園、保育所の皆様にも感謝申し上げます。

現在の勤務校、および前任校の皆様にもたくさんのサポートをしていただきました。これまで研究や教育を通じ、たくさんの応援をしていただいた先生方、そして家族や友人にも感謝しています。

皆様に心より感謝申しあげます。ありがとうございました。

令和2年3月

島田 由紀子